

若き士官の航跡

— 海底に眠る僚艦の

かつての英姿を偲びながら —

海軍兵学校七二期

金丸

光

目次

海軍時代の履歴	1
思い出の記	4
一．昭和一八年初頭から九月初旬まで（第二七駆逐隊附時代）	4
二．昭和一八年九月から一九年五月まで（内地転任 大鳳艤装から瑞鶴へ転任まで）	18
三．瑞鶴時代 その一 マリアナ沖海戦（あ号作戦）終了まで	31
四．瑞鶴時代 その二（昭和一九年六月下旬から捷号作戦終了まで）	38
五．駆逐艦桜から紀伊防備隊そして終戦直後まで	55

海軍時代の履歴

(参考)

昭和一四年一二月 一日 (16歳) 海軍兵学校入校

昭和一六年一二月八日

一七年一二月一四日 (19歳) 同校卒業 海軍少尉候補生

開戦 真珠湾攻撃

長門乗組 (実務練習)

昭和一七年六月

一八年 一月一五日

第二七駆逐隊附

ミッドウェー海戦

武蔵に便乗 トラックにて時雨に着任 (二三日)

ケ号作戦 (ガダルカナル撤退作戦) 参加

昭和一八年四月

六月 一日

海軍少尉

山本 五十六戦死

七月二〇日

夕暮乗組発令 同日夕暮沈没のため赴任不能

時雨乗艦のまま

コロンバンガラ増援作戦参加

九月 一日 (20歳)

横須賀鎮守府附

一四日 時雨退艦 空路ラバウルからトラックへ

二一日 トラック発 (大鷹に便乗)

大鷹 小笠原沖で被雷

二六日 横須賀着

二七日 横須賀鎮守府に着任

自宅待機

一〇月一〇日

大鳳艤装員（在川崎重工神戸造船所）

昭和一八年一〇月

昭和一九年 三月 七日

大鳳竣工 大鳳乗組（甲板士官）

学徒出陣

三月一五日

海軍中尉

四月一五日 大鳳リングに進出 機動艦隊旗艦となる

五月 六日

瑞鶴乗組（九日 大鳳退艦 即日着任 於リング）

五月二五日

瑞鶴分隊長（第二分隊長）

昭和一九年七月

六月一九、二〇日 マリアナ群島沖海戦

サイパン玉砕

二〇日 瑞鶴機動艦隊旗艦となる（一九日 大鳳沈没により）

一〇月二五日 比島エンガノ沖海戦で瑞鶴沈没（捷号作戦）

一一月一〇日（21歳）

駆逐艦桜 艤装員（在横須賀海軍工廠）

一二五日

駆逐艦桜 水雷長兼分隊長（桜竣工により）

一二月 一日

海軍大尉

二〇年七月一日 桜 磁気機雷に触雷沈没（大阪湾）

二〇年 七月二〇日 紀伊防備隊分隊長 (二五日着任)

八月一五日 終戦

終戦処理業務

昭和二〇年八月六日

広島原爆投下

十一月三〇日 (22歳) 予備役編入

充員招集

一月一日 第二復員事務官 (高等官六等)

大阪地方掃海支部分隊長

昭和二年 四月一日 第二復員事務官 (二級)

六月一五日 充員招集解除 復員事務官 (二級)

この間 瀬戸内掃海作業に従事

二年 八月一五日 (23歳) 依願退職

思い出の記

一・昭和一八年初頭から九月初旬まで（第二七駆逐隊附時代）

前年一月一日に海軍三学校（兵学校、機関学校、経理学校）卒業後、瀬戸内海柱島に在泊の戦艦六隻（長門、武蔵、扶桑、山城、伊勢、日向）に配乗し、二ヶ月の実務練習を終えた各科（兵科、機関科、主計科）候補生は拝謁のため全員東京に集合し、一月一日、拝謁の後、宮中三殿参拝、芝の水交社で海軍大臣との会食を終わって解散、夫々所定の任地に向け赴任の途についていた。

その頃、海軍は開戦初期に占領した広範な地域を確保するため、北はアリユーション、南西方面は仏領インドシナ（ベトナム、カンボジャ等）、ビルマ、蘭領東インド（スマトラ、ボルネオ、ジャワ、チモール、セレベス、西部ニューギニア等）、タイ、英領マレー半島、南東方面は濠の委任統治領の東部ニューギニア、ビスマルク諸島、ソロモン諸島等の要所に基地を設け、根拠地隊、警備隊、航空機隊等が進出し、また艦艇もこれらの地域を含め、内地或いは外地と幅広く在泊していただけに我々の任地も広範

であつた。

私は二七駆逐隊附を命じられトラック在泊の時雨に赴任することになった。

因みにわれわれ兵学校卒業の五八一名の任地の概略は、

飛行学生として	練習航空隊に	九〇余名
南東方面陸上基地	一二ヶ所に	五〇余名
南西方面陸上基地	六ヶ所に	二〇余名
潜水隊附	八ヶ潜水隊に	一〇余名
駆逐隊附	一九ヶ駆逐隊に	四〇余名
戦艦	九隻に	一〇〇余名
巡洋艦	三二隻に	一九〇余名
空母	一〇隻に	五〇余名
その他の艦艇	四隻に	一〇余名

であつた。

これらは候補生教育の第二期の配置教育を兼ねていたもので、少尉任官と同時に大幅な異動があり、六月一日付で陸上基地勤務や艦船乗り組みの中から飛行学生として更に一七〇余名が練習航空隊に、四〇余名が潜水学生として潜水学校に転任となった。

因みに飛行学生の教程は満一年、潜水学生は五ヶ月であつた。

さて南方方面所在の艦船、部隊に赴任の連中は、呉在泊の艦船に赴任の連中と共にその日の夜行列車で呉に直行することになっていた。

従って出発までに時間もあつたので、何か買物でもと思い、友人達と取り敢えず銀座に出てみたもの特に欲しいものも見当たらず、伊東屋でポケットサイズの計算尺と南方はさぞ陽射しも強かろうと濃淡二種のサンングラスを購入した。

これが初めて貰った俸給の使い初めだったと今になって思い出した。

呉に到着した我々は即刻待機中の武蔵、瑞鶴、瑞鳳に配乗し、前進基地であるトラック島に向け一月七日呉を發つた。これらの艦の護衛は当時の最新鋭の駆逐艦ぞろいで、前年ドイツ海軍の候補生を乗せた艦が撃沈されたことに学び、完璧な護衛体制であった。

私の配乗艦は武蔵で、この時が初めての外洋出撃であった。

ところで我々が向かったトラック基地とは、第一次世界大戦の結果、ドイツ領であつた南洋群島（マーシャル、リアナ、カロリン群島）が我が国の委任統治領となり、その中心的な島がトラックで、環礁に囲まれた広い海域の中に大小の島が点在し、艦隊の泊地として好適のため、開戦初期にわが軍が米領のグアム、ウエーキを占領後、第四艦隊が進出し、我が海軍の南方作戦（内南洋）の根拠地として利用されていたところである。

さて私の赴任する駆逐隊というのは、同型艦または性能の似通った駆逐隊三乃至四隻で構成され、本来は隊として作戦行動するのが建て前で、その隊の指揮官を司令と称し、その乗艦を司令駆逐艦といった。因みに潜水艦は、駆逐艦同様、複数艦で潜水隊を構成、指揮官を司令と称し、その乗艦を司令潜水艦といった。また、これら駆逐隊、潜水隊は複数で夫々、水雷戦隊、潜水戦隊を構成し、その指揮官は司令官と称し、その乗艦を旗艦といい水雷戦隊は軽巡、潜水戦隊は潜水母艦等が当てられるのが建て前であった。複数の戦艦、巡洋艦で編成された部隊を戦隊、複数の航空隊（母艦）で編成されたものを航空戦隊といい、指揮官を司令官といい、少将職であった。これらの戦隊複数で艦隊を構成し、指揮官は司令長官と称し、中将または大将が補職された。

複数の基地航空部隊（航空戦隊）だけで構成され、艦らしい艦もないのに航空艦隊と称したものもある。作戦担当地域毎に航空部隊、艦船、陸上基地、根拠地隊等を網羅して、方面艦隊というのも編成されていた。これらの呼称は部隊の規模の呼称で、陸軍の連隊、旅団、師団、方面軍等の呼称に相当するものであった。司令長官の称号は艦隊の指揮官の外、横須賀、呉、舞鶴の三軍港にあった鎮守府の長の称号でもあり、親補職（しんぽしよく、天皇が任命）であった。

さて、その当時の二七駆逐隊は、時雨、白露、有明、夕暮の四艦で構成されていた。

隊附は司令に直接指示を受ける立場であり、従って赴任先は取り敢えず、当時、司令駆逐艦だった時雨ということになる。

一月二三日、トラックに無事入泊した武蔵には、夫々の艦から待ち構えていたように迎える内火艇が参

集。便乗者は希望に胸膨らませながら、赴任先の各艦に散っていった。

この時、第二七駆逐隊附を命じられたのは、帖佐（同期の桜の作詞者）、蔭山の両君と私の三人だった。

時雨からも芋虫のような格好をした小型の内火艇が迎えに来たが、着いた先は浮きドックで、そのなかに赤茶けた船腹を丸出しにしている艦が時雨だった。

長門で実務練習中、駆逐艦乗りだった先輩の指導官附の話から、駆逐隊の勇ましさに懂れていた私には、この出会いは余りにも期待外れのものであった。聞けば極く最近までの激戦の垢落とすと、損傷箇所修理中とのこと。一緒に着任の二人も同様な気持ちだったことだろう。

時雨は一等駆逐艦としては小型の方で、排水量一六八五トン、長さ一〇七・五メートル、一二・七センチ連装砲二基、単装砲一基、四連装魚雷発射管二基、速力三ノット、昭和一年竣工の艦であった。駆逐艦には普通、砲術、水雷、航海、機関の四科があり、その長を砲術長、水雷長、航海長、機関長と称し、夫々、分隊長を兼務していた。乗員総数は約三〇〇名である。

その時の時雨の士官室士官は、

司令 瀬戸山大佐（四五期） この方は三月に原大佐（四九期）と交代

艦長 山上少佐（五五期） 水雷長 土井中尉（六八期）



駆逐艦 時雨 (Wikipedia より転載)

砲術長 左近允中尉（六九期） 航海長 月原中尉（神戸高商船）

通信士 栗林少尉（七〇期） 機関長 萱沼中尉（海機） の外

隊軍医長の軍医大尉と隊附庶務主任の主計少尉の9名であった。

今回の我々候補生三名の隊附発令は、近く転出の隊内駆逐艦の七〇期の通信士の後任を予定してのことであった。

着任後間もなく三名の内、蔭山は夕暮に移り、時雨には帖佐と私とが残り、その後、前任者が転出のあとを承け、帖佐が時雨通信士、私は隊附のまま時雨に残っていた。艦内ではこのような場合、隊附を航海士と呼ぶのが一般的だったようである。仕事は隊附には受け持ちの分隊がないので、人事事務がない以外は通信士の仕事と殆ど同じで、電報の発着信処理と航海中の艦位測定、天気図の作成等が主であり、碇泊中は朝の体操の号令官として通信士の帖佐候補生と協同しての作業であった。

その頃の艦位測定は、六分儀で三個以上の星の高度を計り複雑な計算で艦の位置を求めるのであるが、航海中三直での当直の外の黎明時、薄暮時のこの作業は航海士の泣き所であったが、また楽しみでもあった。当時は、時計も精度が悪く毎日、日差を計り天体観測時の真正時をその都度算出しながらの作業で、最近のように精度のよいクォーツ時計や人工衛星からの電波で瞬時に現在位置が分かる機器の出現等はないもよらぬことであった。因みに帖佐君は後日、潜水学校在学中に例の「同期の桜」の歌詞を作詞した男である。

ところで我々が着任した頃は、南東方面海域では、前年八月米軍のガダルカナル島進攻以来、血みどろ

の攻防戦が繰り返されており、駆逐艦も沈没や損傷で固有の駆逐隊としての作戦行動も出来なくなり、隊編成を離れ個々或いは他隊の艦と合同で任務が与えられる機会が増えていた。特に米軍が「ガ」島の飛行場を占領してからは、兵力の増援はもとより、武器弾薬、糧食、医薬品の補給も困難となり、在島の我が陸海軍の将兵は飢餓と疾病で惨憺たる状況下にあった。これに対し我が方は、その補給に高速の駆逐艦を当て、暗夜を利用し、小刻みの輸送を行っていた。これを米軍では「東京エクスプレス」我が方では「ねずみ輸送」と呼んでいた。駆逐艦は本来は駆逐隊として、その強力な魚雷を主力兵器とし、高速を利用して敵の主力に肉薄、雷撃によりその主力艦を破砕、撃沈するのが任務であり、兵力や物資の輸送に従事するのは乗員としても誠に不本意なことであつたが、戦局の推移はそれを許さず、小型高速の駆逐艦は使い勝手もよいせいかな、この作戦に頻繁に使われ、時雨もその一端を担っていたのであろう。

やがて、「ガ」島に対する増援も、海空を制した米軍の阻止により、途絶えがちになり、在島の陸海軍部隊は武器弾薬はもとより食糧、医薬品も欠乏し、飢餓と疾病に苦しむ一万数千に及ぶ将兵の撤退救出を計らなければならぬ事態となり、二月一日より、「ケ」号作戦と呼ばれる撤退作戦を実施することになった。我々が着任後間もなく、浮きドックを出た時雨は、この「ケ」号作戦に支援部隊の一艦として参加することになり、一月三一日トラックを出撃した。支援部隊は、戦艦二、重巡四を本隊、軽巡四、駆逐艦九を警戒隊とし、これに空母二を加えた大部隊で、撤退部隊を輸送する我が駆逐艦を襲おうとする敵に備え、作戦終了まで「ガ」島東方海域を遊弋した。当時、戦闘の怖さを知らなかった私は、輸送担当の駆逐艦で直接「ガ」島の海岸まで行つてみたい衝動に駆られたが、詮ない仕儀であつた。

この作戦では、別動の二二隻の駆逐艦が輸送に当たり、三次に亘って毎回二〇隻が出動、約一万二千名の将兵の撤退に成功した。

当初、連合艦隊司令部では、これら輸送駆逐艦の半数位の損失を覚悟したが、沈没一隻、損傷三隻の軽被害で済んだのも幸運であった。この作戦は我々七一期にとつては初陣で、色々の形で朋友九六名が参加しているが、その中の一人となれただけでも幸運と思わねばなるまい。

作戦を終り、トラツクに帰投した時雨は、損傷艦の内地回航の護衛やら、内地から南方にいく輸送船の護衛等で、比較的穏やかな内に日を過ごしていた。この時期は海軍としても特別の作戦もなく、一番平穏なひとときでもあった。

そうこうする内に五月中旬、一年前に無血占領したアリューシャン列島のアツツ島に敵が侵攻、この救援のためトラツク在泊の艦船も東京湾に集結することになり、連合艦隊旗艦の武蔵をはじめ金剛、榛名、筑摩、利根、飛鷹および時雨を含む駆逐艦七隻も東京湾に急航した。その時、武蔵には山本五十六大将の遺骨が安置されていたとは後になって知った。

やがて我々が東京湾に入った時には、既に瀬戸内海西部において訓練を終わつた機動部隊の各艦も集結しており、木更津沖は大艦隊出現の観を呈していた。これら集結した各艦は北方作戦に備え、急遽防寒衣類の積み込み等を行い、航空機搭乗員には北方気象の講習を行う等、直ぐにも出撃するかの緊迫した状況であったが、アツツ島に対する敵侵攻が早く、時間的に間に合わなくなったばかりでなく、南東方面の戦局も急を告げ、水上艦艇の南方進出が急がれたため、この作戦は取り止めとなつてしまった。そのためア

ツツ島守備隊は、山崎部隊長以下全員玉碎の悲運の結末となった。

この東京湾在泊中の六月八日、瀬戸内の柱島沖に碇泊中の戦艦陸奥が原因不明の大爆発事故で沈没するという大事件が発生、全海軍を震撼させた。

陸奥は長門と共に武蔵、大和が就役するまでは、日本海軍を象徴する戦艦であっただけに、誰もが今後の戦局に不吉を予感したことであろう。

この東京湾待機中の六月一日、我々七一期は少尉に進級した。

意気込んでいた北方作戦も前述のように中止となつて、時雨は単艦で佐世保に回航、同地から南方に向かう輸送船を護衛しながら、再びトラックに進出した。赤道直下のナウル島、オーシャン島に医薬品と食糧を補給しに行ったのも、この直ぐ後であった。当時はこの海域は比較的安全で、島の近くに漂泊して島からの引取り船が来るまで、のんびり眺めた島一帯の景観は素晴らしく、赤道直下の楽園として未だに心に残っている。

こんな中にも毎日傍受する電信は思わしいものは殆どなく、「ガ」島撤退後の周辺島嶼への兵力増援や物資補給に奔走する軽巡および駆逐艦で構成する増援部隊の被害がしばしば報じられ、戦勢日増しに不利を感させられていた。「ガ」島を攻略した米軍は矛先を、その直ぐ北隣のニュージョージヤ島のムンダに向け、わが方がこの地の確保のため、その手前のコロンバンガラ島へ緊急増援が必要となり、「ガ」島の時と同様、駆逐隊による「ねずみ輸送」が実施され、これを阻止しようとする米軍との戦闘が頻繁に繰り返されていた。前述の被害はその結果である。駆逐艦による輸送は、その高速を利用し、夕刻になって

敵機の襲撃がなくなった時間帯に敵の制空圏内に突入、目的地まで三〇ノットの高速で航行、荷揚げの後再び高速で夜明け前までに敵の制空圏外まで逃げ、圏外に出てから通常速力で基地であるラバウルに帰投するのが常道であった。

やがて、わが駆逐艦の被害増大に伴い、七月になって時雨も増援部隊に編入され、ラバウルに進出、生きるか死ぬかの作戦に関わることになり、わが生涯もこれまでと観念したものである。ラバウルは昭和一七年一月、作戦根拠地トラックの側背を固める必要から占領した、濠洲の委任統治領ニューブリテン島の東部にある要衝で、当時から整備された飛行場が二ヶ所あり、天然の良港にも恵まれていたことから、航空隊および水上艦艇の多くが進出し、戦域が南半球まで拡大するに伴い、ソロモン、ブーゲンビル等、南東方面作戦の根拠地として重用されるようになり、前年一二月に編成された南東方面艦隊司令部の下に重巡島海を旗艦とする第八艦隊も進出し、陸海空に亘る熾烈な戦闘の最前線の作戦基地となっていた。

われわれが進出した時期には「ガ」島を占領した連合軍がニュージョージヤ島の我が航空基地ムンダ攻略に全力を傾け、これを守り抜こうとする我が軍との間に熾烈な攻防戦が行われていた。戦時中流行し、今でも歌われている「ラバウル航空隊」の歌は此所を基地にした航空隊の当時の活躍を謳ったものである。さて増援部隊に編入されて初めての任務は「ガ」島の直ぐ隣のイサベル島への物資補給であった。この島には海軍の陸戦隊が守備隊として在島していたが、「ガ」島陥落後は取り残された形になり、食糧、医薬品が欠乏、飢餓と疾病で困窮を極めており、その救援が急がれていたのである。既に敵の制空下の島への輸送であり、打ち合わせに従い、同島の北端にあるレカタに進入した。レカタは一時、わが軍の水上機

の基地として使われていたが、まともな海図がなく手書きの見取り図様の原図を青写真にしたものが唯一の頼りで、要所々に篝火（かかりび）を焚いて迎えの態勢をとった真つ暗な湾内への進入は、いつ坐礁するか、触雷するかと、おっかなびつくりの航行であったのを思い出す。

それから間もない八月一日、時雨は既に何回となく実施されていたコロンバンガラ島への輸送作戦に参加、新鋭駆逐艦の萩風、嵐、天霧と共にブーゲンビル島南端のブインから陸兵を乗せ、深夜、コロンバンガラ島の東岸ヴィラ泊地に向かった。この時の戦闘状況は「日本水雷戦史」に詳しく記載されているが、泊地到着寸前に多数の敵魚雷艇の待ち伏せに遭い、私としては初めての敵を間近にしての戦闘を体験した。探照灯で照らされた敵艇の乗員の顔が分かる位の至近距離での戦闘だった。「水雷戦史」に記載はないが、この戦闘で時雨の主砲の初弾が敵魚雷艇を直撃し、折から下艦用意で上甲板にいた陸兵が歓声をあげて喜んだのを今でも思い出す。

この夜、警戒艦として行動中の天霧が、敵魚雷艇と衝突これを沈没させたが、この敵艇がPT一〇九で、ケネディ（後の米大統領）が艇長だったとは戦後になって初めて知った。奇しくも時雨も後の米大統領と同じ海域で戦ったわけである。この時は敵魚雷艇を掃討し、予定通り増援の陸兵を揚陸し四艦とも無事ラバウルに帰投できた。ラバウル帰投後、燃料補給の上、中三日を置いて八月六日未明、再びコロンバンガラ輸送のため僚艦三隻と共にラバウルを出撃。この時は前回敵魚雷艇と衝突、艦首を損傷した天霧の代わりに江風が入り、時雨は陸兵を乗せず警戒艦となり、隊列の最後尾を航行した。

要領は前回同様、「ガ」島の敵航空基地から三〇〇マイルの圏内に日没とともに突入し、三〇ノットの

高速でブイン経由、陸兵を乗せ「コ」島のヴィラ泊地を目指した。

あと一時間程で到着と思われる頃、私は艦位を測定するため「コ」島の両端を艦橋の左の大型双眼鏡で探していた。この夜は全くの暗夜で、その上、小雨模様で視界が悪く、島の海岸線もはっきりしない程であった。双眼鏡を水平に保ちながら探していると、白波がぼつんぽつんと間隔を置いて目に入った。「司令、隊形が変わったんですか。左に白波が見えます。」と私が言った途端、司令は大声で「敵だ。左魚雷戦、左砲戦。」と矢継ぎ早の号令。これには私もびつくりした。時雨には片舷三基ずつ大型双眼鏡が備えられ、夫々見張員が就いて海上を見張っていたのだが、視界が余りにも悪く水平線を判別出来なかったのであろう。見れば、どの双眼鏡もやや上方を向いている。この時の時雨は「コ」島に近づく前から左側（「コ」島側）を特に警戒し魚雷発射管を左に向け、何時でも発射できる態勢でこの海域に入っていた。

やがて、艦長、水雷長が敵を確認出来たところで舵を右に切り魚雷を発射したが、それと前後して、前方を航行している我が三艦につきつぎと敵魚雷が命中、紅蓮の炎に包まれた。時雨の艦首を白い雷跡が走っていくのも視認され、転舵していなければやられていただろう。

嵐から「われ魚雷命中」の無線電話の連絡があつたが、他の二艦は一言も発する間もなく沈没してしまつた。高速で航行していた時雨は、そのまま僚艦の百メートル余り横を通過したが、火炎を背景に動き回っている乗員の姿も見え、火炎の熱気が伝わってくる程であつた。これら三艦には陸兵も三〇〇名位ずつ乗っていた筈であり、乗員と共にその大多数が水漬く屍となつてしまつたことであろう。

前回、魚雷艇での襲撃に失敗した米軍は駆逐艦数隻で待ち伏せしていたのである。

しかもレーダーを装備しているので、あの暗夜でも早々我が方の動きが分かっていたのであろう。

瞬時に単艦となつてしまった時雨は、一時その場を離脱し、予備魚雷を発射管に装填し、約二〇分後にその海域に戻ったが、既に敵を発見出来ず、僚艦の姿はなかった。この戦闘中、何時故障したのか、ジャイロコンパスが狂っているのに気付き、それからが大変だった。取り敢えず磁気羅針儀を頼りに北を目指したが、現在位置が確認できない程恐ろしいことはない。先程、戦場に戻った積もりが或いは違っていたのではないか。沈んだ艦の乗員の漂流しているのも見当たらなかったのはどうしたことか等々。

万一坐礁でもしようものなら、夜明けと同時に敵機の餌食になるのは間違いないし、とにかく一刻も早く敵の制空圏外に出てしまわねばと、水中探信儀で海底を探りながらの避退であった。本来ならば航程測定儀とジャイロコンパスに連動する航跡自画器というものが、自艦の航跡を自動的に記録するので、およその現在位置は判断できるのだが、ジャイロが狂ってしまったては役立たずである。

やむなく磁気羅針儀を頼りに帰投を急ぐ内に夜が明け初め、視界も良くなったものの、今度は敵偵察機が恐ろしい。見付からぬようにと祈りながらの航海だったが、とうとうB二四に掴まってしまい、一時間近く付き纏われた挙げ句、投弾一発を食らい至近弾により艦首右舷側に大穴を開けられたが、その後は敵機の来襲もなく、どうにかラバウルに帰投できた。ラバウルに帰投後、工作艦の明石に横付けし損傷箇所の修理をしたが、被害は外板に大穴が出来た以外、比較的軽微だったようである。

さて、コロンバンガラ増援に全力を傾けているうちに、敵は「コ」島を飛び越え、その北西にあるペララベラ島に大挙上陸してきた。同島には僅かな陸戦隊が配置されていたが、とても戦える兵力ではない。

この救援のため我方は、陸海軍の部隊、数百名を大発や艦載水雷艇、駆潜艇といった小型の舟艇一〇数隻に乗せ、いわゆる舟艇機動による逆上陸を行おうと八月一七日未明、ブーゲンビル島の南端ブインを出撃した。時雨はこの舟艇隊を護衛する水雷戦隊（駆逐艦四艦）の一艦としてラバウルから出撃、途中舟艇隊と合流、ペラペラ島の上陸地点に向かった。同一七日深夜、上陸点近くで舟艇隊を分離した直後、駆逐艦四隻からなる敵艦隊が近付いてくるのを発見、この敵を舟艇隊に向けさせまいと、彼我兵力ほぼ均衡の夜戦が始まった。双方とも砲戦、魚雷戦を華々しく戦ったが、どちらも有効弾がない。私は艦の中央付近にある二五ミリ三連装の機銃指揮官を命じられ、時々近付いてくる敵機に銃弾を浴びせさせていた。この夜戦は随分長かったように思うが、お互い大した被害もないまま、引き分けのように終わってしまった。幸い舟艇隊はその間に上陸に成功した。

この夜戦において、敵味方の曳光弾が夜空に流れていた様は、弾丸の恐怖を忘れさせる程美しかった。やがて、ラバウル帰投後、夜が明けてから見た各艦の砲身が、錆止め塗料の赤い色だけになっていたのには驚いた。発砲の熱で表面の塗料がすっかり剥けてしまったのである。この戦闘の最中、仰ぎ見た月が満月で、その日が私の満二〇歳の誕生日であったのも思い出の一つである。

ラバウルに帰投後、補給整備を終わった時雨に再び新しい任務が与えられた。

その頃、東部ニューギニアにも敵が上陸し、激しい攻防戦が続けられ、補給、増援がままならぬ我が軍は飢餓と疾病に悩まされていた。時雨はこの地の傷病兵をラバウルに移送する命を受け、単艦で九月初旬ツルブに赴いたが、深夜、乗り移ってきた兵士たちの余りにも惨い姿に慄然とした。

ガ島撤退の際は直接撤退兵の姿を見ることが無かったので、飢餓と骸骨のように痩せ衰えている兵や、手当も不十分な傷病兵に接するのは初めてであったが、糧道を絶たれた陸上部隊の悲惨さは正に目を覆いたくなる程であった。

二・昭和一八年九月から一九年五月まで（内地転任 大鳳艦装から瑞鶴へ転任まで）

ところで私には過ぎる七月二〇日付で夕暮乗組の転勤電報が来ていたのだが、夕暮は折からのコロンバングラ輸送作戦で、丁度その日に雷撃により沈没してしまった。夕暮沈没を電報で知り、転勤先のなくなってしまった私は、そのまま時雨に乗っていたのである。

まさか人事局で私も夕暮で戦死と考えられては困ると思ひ、司令に「金丸健在なり」と人事局宛て発信を依頼しておいたが、果たして発信してくれたか気にしながらの勤務であったが、やっと九月一日付で横須賀鎮守府附の電報がきた。横須賀鎮守府附というのは、生死不明者に発令されるのが例だったので、或いは生死確認のためだったかも知れないが、とにかく任地が決まったのに安堵した。

転勤発令となれば、直ぐにも赴任するべきだが、ラバウルからの便がなかなか無い。当時、ラバウルには第八根拠地隊があり、交通便はその司令部の管轄なので、司令部の担当参謀に直談判して、どうにかトラックまでの飛行艇に乗せて貰えることになった。席数に限度のある飛行艇では、少尉風情では搭乗も簡

単にはいかないのも当然ながら、便数の少ないのにも驚いた。予定離水時刻に合わせ、九月一四日未明、時雨を退艦、時雨の内火艇で飛行艇基地まで送って貰い機上の人となった。

飛行艇に乗るのは後にも先にもこの時だけだったが、軍用だけに旅客機と違い乗り心地は余り感心したものではなかったが、よい体験が出来た。その頃はラバウル付近も敵機が姿を見せるようになっており、敵機に見付かれば鈍重な飛行艇は一溜まりもない。その為未明の発進となっていた。

夜が明けてからは、窓から外を見ては敵機の存在を気にしながらの数時間であったが、無事トラック環礁内に着水、取り敢えず現地の水交社に宿を取った。横須賀に帰るには、ここで内地に帰る便を待たなければならぬ。

待つこと約一週間、大鷹（たいよう）という改装空母が横須賀に帰るといふ。

この船は建造中の春日丸という豪華客船を徴用し、特設空母に改装したもので、長さ一八〇メートル一万八千トン、速力二一ノットの艦である。便乗するには申し分なし。早速荷物を纏め大鷹に行つたところ、事前に手続きがしてないと駄目だという。手続きの必要を知らずに乗り込んだのは当方の手落ちだが、この便を逃しては次が何時になるか知れたものでないと、いろいろ交渉したが、当直中の特務少尉が頑強に拒否し埒が開かない。事前に手続きを取らないと、陸上基地に便乗者名簿も残らず、また乗艦中の寝泊まりの場所の手配も出来ない事情は納得できても、何としてでもこの便に乗ろうと舷門にある士官の名札掛けから頼れる人を捜した。甲板士官 少尉 木金葆夫という同期生の名札を見付け、早速面会を申し込んだ。彼とは兵学校時代、特に接触はなかったが、変わった名前なので名前だけは知っていた。彼は、

「航海中は自室に寝ることもないので俺の部屋を使え」と快く応じてくれ、正に地獄で仏の思いであったが、不正規渡航であることには変わりない。何となく落ち着かない便乗航海のはじまりであった。万一この艦が沈没でもしようものなら、後日、私はトラックの水交社を出たまま行方不明ということになり、場合によっては逃亡罪の汚名を被るかもしれない。そのためにも、この航海の安全を祈らざるを得ない心境だった。

大鷹は九月二一日、僚艦の沖鷹と護衛の駆逐艦島風と共に横須賀に向けトラックを出港した。島風は當時海軍切つての高速艦で三八ノット出ると言われた新鋭艦であった。さて乗せて貰った方がいいが、便乗者の身では艦内をうろろするのにも憚られ、食事の時以外は与えられた部屋でゴロゴロして過ごしていた。幸い部屋は、もと豪華客船だっただけに、少尉の部屋としては立派すぎる部屋で、最近のシティホテル並のしつらえで、狭い駆逐艦暮らしだった私には極楽に似たような感じだった。地獄で仏に会い極楽に案内されたわけだ。出港して四日目の九月二四日、今日は秋季皇霊祭だから何か行事があるのでと考えながらベッドにひっくり返っていたところ、朝七時頃、艦尾の方に劇震を感じると同時に電灯が消え、室内は真っ暗闇となつてしまった。航海中は舷窓の盲蓋を閉めてあるので外光は全く入らない。「やられた」と思わず跳ね起き、靴を履こうとしたが置いたところに見当たらない。艦体の激動で動いたのだろう。裸足で飛び出すのもみつともないと思ひ、手探りでやっとなら探して、次は帽子をと机の上や付近の床も探したが手触りなし。こんな事でまごまごして、沈み始めたら部屋から出られなくなると思ひ、とにかく無帽のまま部屋を出て、勝手不如意ながらどうか飛行甲板まで辿り着いた。

飛行甲板には既に多数の便乗者が集まって不安げに洋上を見詰めていた。場所は小笠原の父島の北東二〇〇マイル、横須賀まで一昼夜足らずの航程である。大鷹は艦尾に潜水艦の魚雷を受けたため、舵機と推進機がやられ航行不能となり、いまや巨大な洋上浮遊物と化してしまっていた。幸い、同航の沖鷹は大鷹とほぼ同じ大きさの艦で、これに曳航され二六日夕刻、横須賀に到着した。その頃には、敵潜水艦が内地近海まで出沒するようになっており、動けなくなつた大型船は格好の獲物であるに拘らず、新たな敵潜にも見付からず、また大鷹を襲つた敵潜もどうしたことが再襲撃を行わなかつたのも幸運であつた。こんな状況になると、便乗の身で戦闘配置がないということは恐怖心を募らせ、更に無届け便乗ということ、それが倍加され、東京湾に入るまで敵潜の動きが気になつての航海だつた。

翌二七日、大鷹に別れを告げ、横須賀鎮守府に出頭した。早速、担当官が人事局に連絡を取ってくれたが、差し当たつて任地の予定は無いから暫く自宅待機せよとのご託宣。やはり生死確認の横鎮付だつたらしい。

ところで、その頃の戦況はベララベラ島が敵手に落ちた後はコロンバンガラ島の戦略的価値がなくなつたため、同島に集結していた一万数千の陸海軍部隊の撤退作戦開始を目前にしていた。ソロモン地域の最後の拠点であつたコロンバンガラ島の確保に甚大な被害をも顧みず、死力をつくした増援作戦も実らず、つい一ヶ月余り前、私自身も参加した輸送作戦を最後に増援は打ち切られ、今やその撤退を余儀無くされる程の戦況の急変に割り切れぬ思いであつた。

このコロンバンガラ放棄を機に、御前会議で戦争遂行上全体確保すべき要域（絶対国防圏）を千島、小

笠原、内南洋（中西部）、西部ニューギニヤ、スンダ、ビルマを含む圏域と決定、この国防圏の防備強化が当面の至上命題となった。なおこれに先立つ九月二二日、東条首相はラジオを通じ全国民にこの事態を踏まえ、「二億総決起」を呼び掛けていた。そしてこれを機に理工系・医系以外の学生の徴兵延期の特例も停止され、一〇月二二日には第一回の東京都の大学高専の学徒出陣式が明治神宮陸上競技場で行われたのである。これらの事は後日知ったことで、転勤途上の私は戦況の全体像も内地の様子も分からないままの内地帰還だった。

自宅待機を指示された私は、高円寺にあった自宅で待機すること一〇日余り、一〇月一〇日付で大鳳艦装員」を発令されたが、大鳳の名も初耳でどんな艦だか分からぬまま、とにかく鎮守府の担当官の指示に従って神戸の川崎造船所の大鳳艦装員事務所へ赴任することにした。艦装」というのは艦体が出来上がり進水した艦に、航行・戦闘を行うのに必要な機器類や兵器を取り付ける作業をいうのだが、艦装員の仕事はどんなものか知らぬままの赴任であった。その頃は東京大阪間が特急で八時間かかる時代であった。夕刻の着任も無かるうと、京都に一泊、翌日午前、川崎造船所内の事務所に着任した。

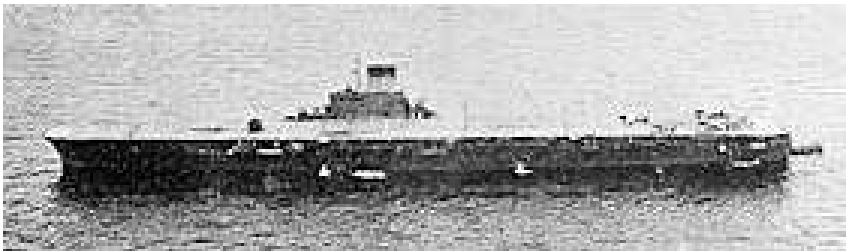
着任してみると、少将の艦装員長の他に艦装員として士官数名、艦装員附として下士官兵五〇名程の所帯である。艦装員事務所はコンクリート二階建てで、屋上のポールに軍艦旗が掲揚されており、二階に会議室と教室の個室があり、一階の大ホールは艦装員附の下士官の居住区として使われていた。

挨拶が済むや早速、甲板士官を命じられたが、若い士官は機関長附の一期上のコレスの機関科の中尉がいるだけで、少尉の私は当然士官の最末席ということだ。従って兵科の初級士官の仕事は一手に引き受け

ねばならない。

午前八時と日没に行われる軍艦旗の掲揚降下の際の衛兵隊の指揮、課業始め前の体操の号令官、甲板士官として日常の雑事処理は勿論、艀装工事の障害除去、清掃作業等々、正に何でも屋であった。特に下士官兵の規律保持、士気の振興は甲板士官の最重要任務であった。宿舎は市内の中山手一丁目の元外国公館を接收し、扇港館と名付けられた本館には佐官級以上が寝泊まりし、その筋向かいのアパートが我々尉官級の住居に当てられていたが、私が着任した時は殆どが空室であった。その後、ひと月余りで三菱の造船所で建造中の潜水艦の艀装員と大鳳の艀装員で満室にはなったものの、暫くの間はわが世の春であった。やがて艀装員事務所の員数も目を追って増え、仕事も艀装完成機器の試運転、引取り等多様になり、時には深夜に及んだが早期竣工を期し誰もが生甲斐を感じていた。

大鳳という艦は昭和一四年度の軍備充実計画で建造に着手された航空母艦で、従来の空母と異なり飛行甲板に防御装甲を施した重装甲空母で、対空火器も最新の高角砲を備え、艦体も堅牢で不沈を誇る最新鋭空母として期待されていた。普通、新造艦は複数艦を並行して建造し、その一艦は海軍工廠で建造するのであるが、今回は予算の関係から一艦だけの建造となり、それが民間造



航空母艦 大鳳 (Wikipedia より転載)

船所に任されたのである。川崎造船所は前に瑞鶴を建造した実績を買われての今回の受注だけに、この新鋭艦の建造には格別の熱の入れようで、職員、工員の気迫は凄まじい程であった。その性能は、装甲が厚くなっただけ重くなり、搭載機数や速力は減ったが、当時としては、世界一の新鋭空母といえるものであった。

最近のジェット機を搭載する米国の原子力空母とは比較にはならないが、昭和一六年、開戦直前に竣工した最新鋭空母の翔鶴、瑞鶴との比較は次のようである。

	排水量	長さ	馬力	速力	搭載機数
翔鶴型	二五、六七五トン	二〇五メートル	一六〇、〇〇〇Hp	三四・二Kt	七二（一二）
大鳳	二九、三〇〇トン	二五三メートル	一六〇、〇〇〇Hp	三三・三Kt	五一（一）

因みに当時世界一の巨大戦艦、武蔵、大和の機関馬力は一五〇、〇〇〇Hpである。しかも大鳳は完成後、機動部隊の旗艦となる予定で、近く生起が予想される大海戦に間に合わせるべく、その竣工が急がれていた。

やがて、一二月になり艦内に居住出来るようになってからは、士官、下士官兵の着任が急激に増え、私と同期の者も三名となり、夫々部署も決められ、艀装作業の進捗に合わせ、誰もが就役準備に大わらわの毎日となった。一月に入り、神戸における艀装も順調に進捗し、二月初旬に呉回航が予定されたある日、いきなり副長から艦内内規、航海保安部署、戦闘部署の作成を命じられた。

私としては、これらの作成等全く念頭になかったので、びっくりした。こんな大事なものは上級者の仕

事とばかり思い込んでいたのである。部署、内規というものが各艦ごとにあるのは承知していたが、時雨に乗っていた時にも改めて読んだこともなかった。況して大鳳のような大艦で、しかも空母の部署、内規等が、わが手に負えるわけがない。既に就役している艦のものを真似るより仕方がないと思い、返す言葉で、他の空母のものを取り寄せをお願いした。これは早速叶えられて、数日後に翔鶴のものが入手でき、これを手書きで謄写、複数部印刷し、副長、砲術長、航海長、内務長に提出、大鳳に合うよう加筆訂正されたものを清書させ、どうにか間に合わせる事が出来た。

当時は現今のようにコピー機等の便利なものがない時代で、作業はすべて手作業だった。

幸い、甲板士官には結構広い事務室が与えられていて、日頃は甲板下士官、先任衛兵伍長（下士官の最上級者で階級は上等兵曹。陸軍の曹長相当）等の集会所にもなっていたが、そこに、字の上手な事務の出来る下士官や兵を集めての突貫作業であった。従って艦内編制は翔鶴と全く同じ様になり、二月一五日の改正により、飛行隊と母艦は分離されることになっていたにも拘わらず、飛行科も含んだ下記のようになっている。

砲術科 第一分隊（高角砲）

第二分隊（機銃）

第三分隊（射撃幹部）

通信科 第四分隊（通信、暗号）

航海科 第五分隊（航海、見張）

内務科 第六分隊（運用）

第七分隊（工作）

第八分隊（電機）

第九分隊（補機）

整備科 第一〇分隊（航空機整備）

飛行科 第一分隊（戦闘機）

第二分隊（爆撃機）

第三分隊（攻撃機）

機関科 第四一分隊（機械）

第四二分隊（缶）

医務科 第四三分隊（医療、看護）

主計科 第四四分隊（主計、衣糧）

さて、この編制により私の配置は改めて、副長付甲板士官兼内務士兼第六分隊士となったが、戦闘配置は応急指揮官付で中甲板の応急指揮所に待機し、被害を受けた時は、浸水や火災現場での指揮に当たるのが任務である。戦闘配置は地味ながら、初級士官の憧れの配置は何と言っても甲板士官である。

甲板士官というのは、平常は副長の命を承け艦全体の軍紀、風紀の取締りと、艦の日常作業の指揮監督が主任務で、その面では下士官全員に君臨しているようなものである。その甲板士官、しかも最新鋭の

空母で機動部隊の旗艦となる大鳳のである。この時が私の一番得意の時期で、旗艦の乗員として相応しい乗員にしようと、「世界一の空母、世界一の乗員たれ」を標語に甲板棒（甲板士官が作業指揮用に使う棒）を片手に艦内を飛び回っていたものである。私にとつて大鳳は忘れ難い艦であるし、その艦に乗っていたときが一番張り切っていた時代でもあった。

神戸に於ける艤装を終った大鳳は二月初旬呉に回航、最終の検査調整を済ませ、三月七日、竣工引き渡しを受け、海軍の艦籍に入り正式に就役した。この時までには、下士官兵も多数乗艦し、乗組員千数百名の大所帯となっていた。

三月一五日、七一期は中尉に進級した。大艦の甲板士官は中尉配置が建て前で、これで私も名実ともに大鳳甲板士官となったのである。その後戦備を整え、三月二七日、瀬戸内海発、昭南（シンガポール）で軍需品を陸揚げし、四月一五日リング泊地に進出した。泊地に入港するや、待ち構えていた機動艦隊司令長官以下司令部関係者が翔鶴より移乗、ここに晴れて機動艦隊の旗艦となった。

さて当時の私は、神戸では生の情報も得られぬまま、新聞、ラジオによる情報だけしか知らず、前年一月下旬、扇港館でマキン、タラワの玉砕を涙しながら聞いたのが最後で、艦内居住するようになってからは、工場さながらの艦内に缶詰状態で、新聞、ラジオとも縁がなくなり、ひたすら艦の就役準備に追われる毎日で戦況の推移など全く分かっていなかった。ただ、侵攻して来る相当強力な敵機動部隊を中部太平洋に迎え撃つ大海戦が近く行われるであろうことは肌で感じていた。

そして、母艦としての訓練と待機のために燃料の入手し易いリングに進出したものとばかり思っていた。

当時は既に、クエゼリン、ルオットが二月初頭に玉砕、前線基地であったトラック環礁も二月一七、一八日、敵艦載機の大空襲を受け、艦艇、陸上施設とも大被害を受け、前線根拠地としての機能を喪失、更にブラウン環礁も敵手に落ち、引き続きサイパン、テナアン、グアムも空襲され、わが航空部隊は壊滅的打撃を受けるといふ芳しくない戦況下にあった。連合艦隊は、これより先、敵襲の近きを察し、一月下旬から二月初旬にかけて、トラック在泊の主力艦をリングガに回航避難させ、更に瑞鶴、翔鶴を含む機動部隊の一部を内地からシンガポールに進出させ、二月下旬、同地で合同させていた。

その頃の南東方面海域における戦況は、前年九月以降、ブーゲンビル島およびラバウルの攻防を賭け熾烈な海空戦が戦われ、わが方は、なけなしの空母機まで投入し、その大部をも喪失する程の犠牲を払いながらも敵の侵攻を許す結果となり、またニューギニア東部に上陸した連合軍は、その北岸の要衝地を飛び石づたいに西進、比島奪還の足掛かりとなる同島西部に近付きつつあった。一方、太平洋を西進する強力な機動部隊を擁する敵侵攻軍は、サイパン、テナアン、グアムの攻略を企図し、着々準備を進め好機を窺っていたのである。

わが方は、既に展開中の陸上基地航空隊と協力、洋上にこれらの敵を迎え撃ち、一挙に殲滅しようと思画されたのが、「あ」号作戦であった。サイパン、テナアン、グアムが敵の手に落ちれば、大型陸上爆撃機B二九による日本本土の空襲が可能になり、日本の敗戦に繋がるだけに絶対に負けられない作戦である。このように、司令部が大鳳に乗艦してから聞き知った戦況は余りにも深刻であった。

因みに、この「あ」号作戦で主役を演じる第一機動艦隊の編成を以下に掲げる。

第一機動艦隊（長官 小沢中将 旗艦 大鳳）

第三艦隊

第一航空戦隊 大鳳 翔鶴 瑞鶴

第二航空戦隊 隼鷹 飛鷹 龍鳳

第三航空戦隊 千歳 千代田 瑞鳳

第十戦隊 矢矧 他 駆逐艦一五隻

第二艦隊

第一戦隊 大和 武蔵 長門

第三戦隊 金剛 榛名

第四戦隊 愛宕 高雄 摩耶 鳥海

第五戦隊 妙高 羽黒

第七戦隊 熊野 鈴谷 利根 筑摩

第二水雷戦隊 能代 他 駆逐艦一四隻

なお、五月初旬現在、右記航空戦隊の母艦搭乗員は、第一航空戦隊はシンガポール、第二、第三航空戦隊は内地において錬成中であつたが、ブーゲンビル島方面での航空戦で喪つた多数の練達搭乗員の穴を埋めるには、期間も短く誠に不十分な状態であつた。大鳳もリングに在ること半月余り、この間、何度か出動訓練もしたことと思われるが、今ははっきりした記憶がない。ただ陸上基地で錬成していた航空機が乗

つてきて、艦内の雰囲気は異常に活気づいていたことは覚えている。

やがて五月初頭、卒業したての七三期の候補生達、十数名が乗組みとして乗艦、艦内も賑やかになったと思う間もなく、五月六日付で、私に瑞鶴への転勤電報がきた。大鳳の完成に心血を注ぎ、この艦で来るべき戦闘をする積もりだった私は、この期に及んで何事かと不満を感じながら、後ろ髪を引かれる思いで、九日、大鳳を退艦、シンガポールから帰投し、直ぐ隣に碇を入れていた瑞鶴に赴任した。

駆逐艦等の小艦艇乗組の連中は、新造の大艦の冷暖房設備もある居住性の良さを羨んで、「大和ホテルに武蔵屋旅館、瑞鶴アパート云々」と揶揄していたものだが、大鳳乗組を経験した私には、それをいう資格も無くなつた訳だが、その瑞鶴に転勤である。瑞鶴は姉妹艦の翔鶴と共に今次対戦直前に竣工就役した新鋭空母で、翔鶴は横須賀海軍工廠、瑞鶴は川崎重工神戸造船所での建造である。川崎重工の大鳳を建造した船台が、かつて瑞鶴が建造された船台だったという奇しき因縁もあり、自らを納得させながらの赴任であった。



航空母艦 瑞鶴 (Wikipedia より転載)

三、瑞鶴時代 その一 マリアナ沖海戦（あ号作戦）終了まで

着任して与えられた配置は、取り敢えず甲板士官をしておれという。瑞鶴には既に、七二期の甲板士官がおり、おかしな人事と思いつながら命に従った。一方、私の瑞鶴着任と入れ代わりに、同期の野村中尉が軍令部附として転出、私は野村の後を承け、ケツプガンとなった。

大鑑には、士官の公室（食事、休息等に利用）として次の諸室があり、夫々の利用者が定められていた。

士官室 副長以下大尉までの士官（分隊長配置の中尉を含む）

第一士官次室 中少尉および候補生

第二士官次室 特務中少尉

准士官室 兵曹長

第一士官次室は、昔、英国の軍艦では砲郭の一部を利用したことから「ガンルーム」ともいわれ、その所属士官を「ガンルーム士官」といい、その先任者を「ケツプガン」（Captain of Gun-room の略）と呼んだ。大鳳でも艦内居住をするようになった際、一時私がケツプガンのような事をしたが、軍医中尉等先任者が着任してきてからは、士官室次室の若手が代わっていた。ケツプガンというのは、若年士官の統括者で、なかなか気分のよい立場である。食事の際も、食卓の最上席に座り、ケツプガンが箸を取るまで一同食事に掛かれない。浴室は各士官室ごとにあるので、入浴準備が整うと先ずケツプガンに報告がある。

従って毎回一番風呂である。勿論これは艦が碇泊中の話で一旦出港したら、入浴どころではなく、食事も非番の時間に適宜取り、全員一緒など望むべくもなくなるのだが。

瑞鶴着任後間もなく、敵の侵攻近しと判断した連合艦隊司令部は、リングア在泊の艦隊と、内地で訓練中の母艦六隻とその随伴艦に、ボルネオ島の北東にあるタウイタウイに進出を下命。瑞鶴も大鳳、翔鶴と共に随伴艦を伴いリングアを出撃、一五日に同島の湾内に入泊。翌一六日には内地からの部隊と合同。ここに決戦部隊の主力が勢揃いした。この地は決戦を予期している海域にも近く、燃料の補給にも事欠かず、出動訓練に最適と判断し進出したものの、これが予期せぬ敵潜水艦の跳梁により、泊地の外海での訓練も危険となり、特に不断の訓練を必要とする母艦機搭乗員の練度は日と共に衰え、機動部隊の戦力の大幅低下を招く結果となってしまった。

ところで、このタウイタウイ在泊中の五月二五日付で、私に急な人事異動の発令があり、転出する六七期の最上大尉の後任として第二分隊長を命じられた。海軍の分隊長は少佐または大尉が建て前で、場合によって中尉を当てる事ができるとなっており、中尉に成り立てを任命するとは、人不足も深刻になっていたであろう。二分隊は、艦の周囲に八ヶ群に分け二五ミリ機銃三連装一八基と艦橋の前後に各一基、計三連二〇基六〇門の機銃を受け持つ、分隊員約二五〇名の分隊である。

さて分隊長になったものの、今度は士官室の最末席で、食事の席は囑託の歯科医の向かいである。

その時は既に航空隊が乗艦しており、その関係者が多く、士官室も平生の倍近い四〇人位になっていたのではなからうか。食事の時、お替わりの飯を要求しても末席には従兵がなかなか来ない。二分隊は兵員

の数が一番多いので、派出している従兵の半数くらいが二分隊員なのだが、その分隊長が一番無視される恰好で、ケツプガンだった時とは大違いで、お向かいの歯科医と苦笑することしばしばであった。ただ入浴だけは自分で前官礼遇と称し、ガンルームの浴室を一番で使わせて貰っていた。

ところで分隊長になると、輪番で当直将校を務めるが、とくに航海中は艦の操艦をも行う。幸い、私は時雨乗り組みの時、実習がてら操艦をさせて貰っていたので、最初から大して緊張は覚えなかった。当初、新米の当直将校の私の操艦を危ぶんでいた航海長も、直ぐに安心して任せてもらえるようになり、操艦の妙味を堪能できた。特に母艦では、飛行機の発着艦訓練もあり、その際、発着甲板に所定の合成風向、風力を得られるよう操艦する等、他艦ではできない経験もした。

艦の長さ二五〇メートル、二万六千トンの巨艦の操艦は緊張もさることながら、誇らしく嬉しいものである。われわれのクラスでこんな経験が出来たものは極少ないのではなからうか。

さて、第二分隊長の戦闘配置は艦橋の屋上の防空指揮所で、戦闘時、高射指揮官となる砲術長の補佐として、左舷の高角砲および機銃の指揮が任務である。防空指揮所は艦橋の屋上で、青天井で三六〇度の視界がある。対空戦闘となれば艦長も此所に上がり、戦闘の指揮、操艦をする所で、戦闘状況を観察するには最適の場所である。対空戦闘時、ここを戦闘配置とする者は、見張および射撃関係の幹部と伝令くらいで全部で十数名である。千数百名の乗員の百分の一に入ったとは幸運この上なし。

六月に入り、再三に亘る偵察の結果、敵機動部隊の動きから、戦機熟せりと判断、タウイタウイで待機中の機動部隊は、一四日、決戦海域により近い比島南部のギマラスに進出した。この航行中を利用し、対

潜哨戒を兼ね発着艦訓練を行っていた大鳳の艦載機が着艦に失敗、既に甲板上に在った飛行機に衝突炎上させ、数機を海中投棄の羽目に追い込む惨事が発生、これを目撃した私は作戦の前途に暗い予兆を感じたのが未だに忘れられない。一日、ギマラスで補給を終った機動部隊はサルベルナジノ海峡を通過、一日には別動していた第一戦隊（大和、武蔵、長門）等を合同、一七日に巡洋艦以下の小型艦に最後の洋上補給を行い一路予想戦場に向かった。

そして六月一九・二〇日、マリアナ諸島の西方海域においてサイパン島の攻防をめぐる洋上決戦が行われたのである。

日本側

空母 九 戦艦五 重巡一一 軽巡二
駆逐艦三二 潜水艦三四

米側

空母一五 戦艦七 重巡三 軽巡六
防空巡四 駆逐艦五八 潜水艦一四

による大決戦であった。この海戦における我が軍の戦法はアウトレンジ戦法といわれる彼我の艦上機の攻撃距離の差を利用し敵の攻撃圏外から攻撃を反復しようとするものであった。

当時の米艦上機の攻撃圏は三〇〇マイル、我が方は四〇〇マイルであった。

一八日、サイパン島の西七〇〇マイルを東航の我が機動部隊は朝五時、先頭を航行の第三航空戦隊より索敵機一〇数機を発進させ、更に二段索敵として第一航空戦隊からその六時間後に一〇数機の索敵機を発進、敵艦隊の捕捉に全力を傾けた。

やがて、一五一〇、ヤップ島の北東三八〇マイルに敵機動部隊を発見。距離は我が本隊から東三八〇マイルである。直ぐにも攻撃を掛けたいが、なにぶん時刻が遅すぎる。翌朝の攻撃を期して一旦、反転。翌一九日、〇三〇〇 機動部隊は本隊（第一、第二航空戦隊）の前方一〇〇マイルに、重巡、戦艦を基幹とした第二艦隊と第三航空戦隊を前衛として配した縦深配備で、針路北東で進撃を開始した。

我が方は未明より多数の索敵機を発進させ、敵情の確認に努めていたが、やがて日出一時間後の六時半ごろから、敵空母部隊発見の報が相次ぎ、敵情も判明、〇七三〇、第三航空戦隊から第一次攻撃隊発進、続いて〇八〇〇、第一、第二航空戦隊からも攻撃隊が発進した。敵との距離、前衛の三航戦三〇〇マイル、本隊三八〇マイル、まさに計画通りの距離であり、しかも敵に発見されていないという願ってもない態勢であった。

搭乗員の練度に危惧を抱きながらも長官以下司令部はもとより、各艦幹部も戦果を期待し、ほくそ笑んだに違いない。私とて当然、同じ心境であった。かくして、我が方は先んじて敵艦隊主力を発見し、逸早く攻撃隊を発進させることができ、戦勢われに有利の形で開始されたが、午前八時過ぎ、攻撃隊発進の直後、大鳳が敵潜の雷撃を受け、隊列を離れた。瑞鶴艦橋の艦長以下幹部士官達の顔色も一瞬青ざめたが、「戦闘航海に支障なし」の通報で一応安堵していた。何と言っても小沢司令長官座乗の、この大艦隊の旗艦の被雷で、万一の事があれば、今回の作戦に差し支えてしまう。さて、九隻の空母から、二六〇機余の攻撃隊を発進させた我が方は、時間を計りながら戦果の報告を今か今かと待っていた。

ところが目標到達時刻を大分過ぎても、どの隊からも全く報告がない。艦橋の雰囲気は次第に暗さを増

し始めていた。そこに索敵機から新たに別の敵機動部隊発見の報が入り、瑞鶴からも既に発進準備の終えていた第二次攻撃隊一八機をこれに向け発進させた。第二航空戦隊からもこれに前後して六四機の攻撃隊が発艦。正午近くになったであろうか、一機、二機と第一次攻撃隊の味方機が疲れ切った姿で帰艦しはじめ、その報告によれば敵グラマン機多数の待ち伏せに遭い、味方機の多くは撃墜されたという。その頃のグラマンは零戦に優る高性能機となっていた。我が方を発見できなかった敵は、攻撃隊を発進できず、当方の襲撃を感知してから、徹底した防御態勢をとり、可動全機を上空にあげ邀撃に全力をあげていたのである。そのうえVT信管という目標にあたらなくも近付けば作動する新型の信管を装着した対空砲火の効果著しく、敵艦に迫った我が機はつぎつぎに撃墜されたようである。

その間、吉報を当てにしながら待ち続けていた我が軍に更に不幸が見舞った。

午前一一時半、瑞鶴の姉妹艦、翔鶴がまた潜水艦の魚雷を受けてしまった。

正規大型空母三隻の内二隻が敵艦載機の襲来前に潜水艦の餌食となったのである。被雷した翔鶴は午後二時一〇分、遂に沈没、乗員の約七割が艦と運命を共にした。一方、大鳳は応急作業で戦力の回復に努めていたが、午後二時三二分、大爆発を起こし、その二時間後、海面から姿を消した（二度一五分N、一三八度一二分E）。被雷後もさすがに不沈を誇る大鳳だけに被害軽微と思われたが、軽質油タンクに亀裂ができ、漏洩したガスが格納庫に充滿し、換気の効果空しく遂に、重装甲の飛行甲板をも山なりにするほどの大爆発を起こしてしまった。大爆発で艦内大火災の中、護衛駆逐艦の磯風は大鳳に横付けして、生存者の救出に当たり、小沢司令長官以下司令部は駆逐艦経由、重巡羽黒に移乗した。

この大爆発による戦死者は、士官二八名、下士官兵六三二名だったと言われる。

乗組員一八〇〇余名の三〇数パーセントに止まったのは、不沈空母と言われるだけに爆発から沈没までの時間が長かったお陰である。かくして、この日の敵は我が方を発見出来ぬまま、一方的な我が攻撃を凌ぎ切り、我が方は思わぬ伏兵により大鳳、翔鶴の二大空母を喪失するという不本意な結果に終わった。わが艦隊は再度の決戦を期し、一旦避退、燃料補給を行うこととし、翌早朝から洋上補給にかかり、この機を利用し小沢長官は再び羽黒から瑞鶴に移乗、瑞鶴は大鳳に代わり機動艦隊旗艦となった。

一方、我が艦隊の所在を掴めぬ敵は、未明から索敵を開始し、午後になつても日本艦隊を発見出来ずにいたが、午後二時半ついに日本空母をとらえ、その位置を打電した。これより先、午前中から偵察機の活躍で敵艦隊の動静を察知していた我が方は洋上補給を中止し、速力を上げ西方に避退、敵襲に備えていた。

日本空母発見の報で敵は、午後四時過ぎ攻撃隊を発進させた。米側の資料によれば、その米艦載機は、艦戦八四、艦攻五四、艦爆七七の計二一五機だったという。我が方は昨日の攻撃で、その航空戦力の四分の三を失い、残り少なくなつた母艦機で反撃を試みる一方、敵の来襲に備え邀撃態勢を整え待ち構えた。午後五時半頃、太陽が西に傾き始めた頃、敵機の大群が望見され、それから日没にかけて敵機の猛攻が始まった。攻撃は空母が第一目標とされるのは彼我同様である。瑞鶴も集中攻撃を受けながら、巧みにこれを躲していたが、艦橋後方に五〇〇キロ爆弾が命中、戦死四八名の被害を受け、その他にも至近弾六発を浴び、その一弾は艦橋のある右舷側の直近に落ち、その水柱が防空指揮所覆う程であった。ハワイ空襲以来、度重なる海空戦において、僚艦が被害を受ける中、今まで無傷だった幸運艦の瑞鶴も、今回初めて損

傷し四人名の戦死者をだしてしまった。やがて日没となり、この日の敵襲は終わったが、この戦闘で我が方は空母飛鷹を失った。この日、米軍は帰投が夜間となったため、母艦の位置を見失ったり、着艦事故を起こしたりで八〇機を失い、戦闘で撃墜された二〇機を加え計一〇〇機を失ったという。かくて、乾坤一擲の「あ」号作戦は空母三隻、艦載機四〇〇機を失い、目的不首尾のまま終り、機動艦隊は沖繩中城湾に撤退した。

その沖繩帰投の航行中、戦死者の水葬が後甲板で行われた。弔銃に引き続き、喇叭の奏でる葬送の調べに送られ、毛布で巻かれ錘が付けられた遺体は、艦尾に特設された道板から海中に滑り落とされ艦尾波の中に葬られていった。

四・瑞鶴時代 その二 (昭和一九年六月下旬から捷号作戦終了まで)

あ号作戦も不首尾に終り、撤退した我が機動艦隊は二二日午後、ひとまず沖繩の中城湾に寄港、駆逐艦に収容されている沈没艦の生存者および負傷者を大艦に移した。瑞鶴に横付けした磯風から大鳳の生存者や負傷者が仮設された栈橋を渡り、瑞鶴に移るのを舷門まで迎えに行った私は、負傷者の余りにも悲惨な姿に息を飲んだ。両目と口元の部分だけ残し、雪だるまのように首から上を包帯で巻いた負傷者から、「甲板士官」と呼び掛けられても誰か分からず、慰めの言葉を返すこともできなかった。

瑞鶴では取り敢えず格納庫一面に敷物を敷き、そこに負傷者を収容したが、そこに見舞いに行った私は、つい一ヶ月余り前まで、毎日顔を合わせていた人達の余りにも変わり果てた姿に涙を禁じ得なかった。大鳳に乗っていたクラスメイト二名は無傷であったが、一応私の私室に招き入れ、手持ちの肌着と当座の軍資金を与えたのが、せめてもの気休めであった。

負傷者を収容し、中城湾を出港した瑞鶴は瀬戸内海西部泊地（柱島）に帰投。負傷者および便乗者を下艦させた後も、暫く柱島の泊地を動かなかった。やがて呉に入港した瑞鶴は、早速、損傷箇所の修理に掛かると共に、半月余りドック入りし、大鳳の軽質油タンク亀裂の戦訓に鑑み、タンクの周辺の空所をコンクリートで固める工事を行った。また、開発されたばかりの二八連装一二センチ噴進砲（ロケット砲）八基の取付け工事も並行して実施し、対空戦力の強化を図った。

この噴進砲というのは、直径一二センチの砲弾の底部周辺に推薬の噴射孔を設けたもので、砲弾の中に多数の弾子を入れ、所定の距離で砲弾が炸裂、その弾子が喇叭状に飛び出すように造られており、射距離は一五〇〇〜二五〇〇メートルで、二八発の砲弾が二、三秒おきに発射できるもので、ロケット砲としては初歩的なものであったが、取り敢えず敵襲の多い空母だけに装備されたものである。装備に先立ち呉の多くの亀ヶ首の試射場で行われた試射に立ち会ったが、なかなか迫力のあるものであった。

装備後、この噴進砲は第二分隊の管轄となり、発着甲板にも展開配置できるよう増備された単装機銃を加え、二五ミリ三連装機銃が二〇基、単装も三六基となり、分隊員も約三〇〇名に膨れ上がった。

この急激な増員のため、瑞鶴にも軍隊の経験のない中年の補充兵までが乗り組むようになり、人的にも

国力の限界を感じたものである。

さて、サイパン失陥後、わが陸海軍は米軍の次の侵攻指向地域を想定し、この邀撃作戦を地域により次のように策定していた。

捷（しょう）一号作戦　比島方面

捷二号作戦　九州南部、南西諸島および台湾方面

捷三号作戦　本州、四国、九州方面および状況により小笠原諸島方面

捷四号作戦　北海道方面

一〇月一〇日、沖縄本島、奄美大島、宮古島が米機動部隊の激しい空襲にさらされ、更に一二日には、台湾各地も空襲されるに及んで、連合艦隊司令部は「基地航空部隊捷一号及び二号作戦発動」を令し、基地航空機全力を以て猛反撃を企図、敵機動部隊殲滅の好機と捉え、攻撃力増強のため、なけなしの空母機まで投入しての大航空戦が展開された。この航空戦は台湾沖航空戦と呼んでいる。この戦闘は一六日まで続き、約六五〇機の航空機と搭乗員を失いながら、予期の戦果にほど遠い結果に終わった。特にこの大損失の中に、来るべき艦隊決戦を控えて訓練済みの空母機搭乗員の大半が含まれていたのは、日本海軍にとって致命的な痛手であった。

右記の敵襲来が終息した途端、一〇月一七日、比島中部レイテ湾入り口の小島スルアン島にあった海軍

見張所から、敵艦隊近接の報に接し、捷一号作戦が発動され、ここに史上空前の大海戦の幕が切つて落とされた。先にサイパンを奪われ、本土空襲の足掛かりを与えてしまった日本としては、比島は南方油田地帯との交通確保のためにも絶対に手放せない最後の重要地域である。石油がなくなれば、艦隊や航空機はその存在価値もなくなるので、海軍としては使える艦は全て投入しての防衛作戦であった。

日本側の作戦はリングに待機中の栗田中将を指揮官とする第一遊撃部隊が二五日黎明時に敵の上陸地点のレイテ湾に突入、南西列島に待機の第二遊撃部隊もこれに呼応してレイテに殺到、瀬戸内海に待機の機動部隊はルソン島東方海域に進出、敵機動部隊を北方に牽制誘致し、前記の突入に策應させる。また基地航空部隊は比島に集中し、第一遊撃部隊のレイテ突入に先立ち二四日を期し、敵空母及び攻略部隊に航空総攻撃を敢行するというものであった。

この作戦では、一〇月二三日から二六日にかけて、シブヤン海、スリガオ海峡、エンガノ岬沖、サマール島沖等と比島の五〇万平方キロの広大な海域で、左記の兵力により、激しい戦闘が行われた。

日本側

第一遊撃部隊

第一部隊

戦艦 三 大和、武蔵、長門

重巡 六 愛宕、高雄、鳥海、摩耶、妙高、羽黒

軽巡 一 能代

驅逐艦 九 早霜、秋霜、岸波、沖波、朝霜、長波、藤波、浜波、島風

第二部隊

戰艦 二 金剛、榛名

重巡 四 熊野、鈴谷、利根、筑摩

輕巡 一 矢矧

驅逐艦 六 浦風、浜風、磯風、雪風、野分、清霜

第三部隊

戰艦 二 山城、扶桑

重巡 一 最上

驅逐艦 四 滿潮、朝雲、山雲、時雨

第二遊撃部隊

重巡 二 那智、足柄

輕巡 一 阿武隈

驅逐艦 七 曙、潮、不知火、霞、若葉、初春、初霜

機動部隊本体

空母 四 瑞鶴、瑞鳳、千歲、千代田

戰艦 二 伊勢、日向

軽巡 三 多摩、五十鈴、大淀

駆逐艦 八 初月、若月、秋月、霜月、桑、楨、桐、杉

我が方が機動部隊といっても、既に空母機の搭乗員も不足し、四隻で一五九機の収容力がありながら、実際の搭載数は一一六機で甘んじなければならなかった。しかも搭乗員は錬成途上のものが殆どで、発着艦がやっとなという者が多く、洋上航法も覚束ない状態であった。従って、遥かに優勢な敵に対抗するためには、比島各地に散在する陸上基地の航空機に頼らざるを得なかったが、台湾沖航空戦でその多くを消耗し、その数も六〇〇に満たず、これもまた技倆も不充分的ものが多かった。

神風特攻が実施されるようになったのも、この海戦が契機である。

右記に対し連合側の兵力は

空母一一 護衛空母一八 戦艦一二 重巡六 軽巡一一 駆逐艦八一 潜水艦一三三
空母機一三〇〇

さて、私の乗っていた瑞鶴に話を戻そう。

呉における工事を終えた瑞鶴は、内海西部で航空隊の錬成のため発着艦訓練や、雷撃目標艦として出動を繰り返し、また増員された兵員の速成訓練に明け暮れていた。

やがて捷号作戦が発動され、一〇月一八日、小沢中将とその司令部は大分基地から瑞鶴に移乗、再び瑞鶴が旗艦となった。出撃に先立ち徳山の燃料廠で燃料搭載をしたが、同廠のタンクも底を突き、一部の艦は、作戦に参加しない隼鷹という空母から重油を分けてもらった程、燃料は逼迫していた。

この出撃に際し、既に数少なくなった母艦搭乗員を各陸上基地から急遽掻き集め、飛行隊関係者および整備員の配乗も出撃前夜まで引つ切り無しに続いた。

燃料搭載後、母艦は二〇日午前中から飛行機の収容にかかり、午後五時半、機動部隊は豊後水道を出撃した。目的地はルソン島の東方洋上である。

機動部隊は対潜警戒を厳にしながら南下を続けたが、二一日、二二日は事もなく経過し、二三日になっても敵に見えられた気配がなく、このままでは作戦目的の敵機動部隊の北方誘致は見込めないと、無意味の電文を発信したり、一部の艦を更に南下させ、敵に探知されるよう策を弄したが、その甲斐なく敵は我が方の動静に気付かぬままこの日も暮れた。一方、第一遊撃部隊はリングからブルネイに移動、給油の上二二日ブルネイから出撃サンベルナジノ海峡を目指して進撃中、二三日待ち伏せていた敵潜水艦の襲撃により、栗田長官の旗艦の重巡愛宕と摩耶の沈没、栗田長官は戦艦大和に旗艦を変更したとの報を受け、戦況の厳しさを痛感しながらの一日であった。

さて、明二四日は航空総攻撃の日である。瑞鶴では攻撃隊発進の準備と、敵来襲に備え各戦闘部署ごとに戦闘準備の確認をした。私も配下の機銃、噴進砲の幹部を集め、戦闘の心構えを諭し、伝え聞いた開戦

初頭わが航空隊により撃沈された英国の戦艦プリンスオブウェールズとレパルスが、沈没間際まで対空射撃を続けていたという話を例に引き、最後まで奮戦するよう激励したのを覚えている。

明けて二四日早朝、瑞鶴からも索敵機数機を発進させ、〇八二〇基地航空隊から五群の敵艦隊発見の報により、この確認のため更に索敵機を発進させた。一一一五、この索敵機からも敵発見の報を受け、可動全機の攻撃隊を発進させることになり、一一四五、檣頭に「Z旗」を掲揚、攻撃隊は勇ましく発進を開始した。

「Z旗」は明治三八年五月二七日、露国バルチック艦隊に大捷を博した日本海海戦で東郷司令長官が旗艦三笠の檣頭（しやうとう）に掲げさせた信号旗で、当時は「皇国の興廃この一戦に在り各員一層奮励努力せよ」を意味した。この故事に因み、今次の大戦でもハワイ奇襲時とサイパン沖海戦（あ号作戦）の際、全軍の士気鼓舞のため旗艦の檣頭に掲揚したことがあり、今回は三度目であった。攻撃隊の発進後、敵が部隊の存在を認識させるため、機動部隊は再び進路を南にとり敵方に近付くよう進撃した。

瑞鶴艦上では攻撃隊からの戦果を心待ちにしていたが、遂に戦果の報告を受けること無く終わった。

攻撃隊は攻撃終了後は比島の航空基地に向かうよう指示されていたが、これは、搭乗員の技量が洋上航法も未熟の上、帰投出来ても着艦もおぼつかないし、母艦そのものも無事とは限らないと考えての指示であったろう。この間、攻撃隊から外されていた数機の戦闘機が比島の陸上基地に向けて飛び立ったが、そ

の戦闘機隊の中に同期の井上中尉を見付け驚いた。内海出撃直前に飛行機ごと乗艦していたのであろう。出港すると士官室で一緒に食事等する機会もないので、まったく知らなかった。出撃直前、機側で彼と話したが、彼曰く「搭乗員が未熟なので、比島の基地への道案内だよ」と不満げに答えたのが心に残っている。台湾沖航空戦で大戦果の虚報に踊らされ、その戦果を更に拡大のため、空母機まで投入してしまった報いがこれ程大きいとは我々には想像も出来なかった。

これら戦闘機は直衛機として残しておいたものの一部であったと思うが、陸上基地航空隊に協力させた方が有効と考えての処置であったのだろう。

やがて陽も西に傾き始めた一七〇〇頃、艦爆らしい敵の索敵機が我が艦隊の上空まで飛来し、暫く触接していたが、各艦の砲撃で南方に避退していった。

避退したこの索敵機の日本機動部隊発見の報告電で、敵は直ぐにも攻撃隊を向けてくる恐れもあり、瑞鶴も直衛戦闘機数機を上空に上げ、艦は対空戦闘態勢を整え日没まで待機したが、この日は敵襲のないままに夜を迎えた。

レイテに向けシブヤン海を進撃中の第一遊撃部隊は、この日午前中から五波に及ぶ敵艦載機の猛攻に遭い、各艦相当の被害を被ったが、特に武蔵に攻撃が集中し、五時間余りの激闘で魚雷二〇本、爆弾一七発を受け、行動の自由を失い日没後、遂に沈没した。この間の戦闘状況は、時々受信される電文で、ある

程度知ることには出来たが、一刻も早く知りたいたと、通信室まで出掛けていつて着信草々の電文を垣間見たりしたが、特に武蔵が何本かの魚雷を受けながらも、「われ戦闘航海に差支えなし」の電文に通信室全員が期待と安堵を感じていたのだが。

明けて二五日、遊撃部隊がレイテ突入の日である。そしてわが機動部隊に敵母艦機の来襲必至の日でもある。

この日は瑞鶴終焉の日でもあるので少し詳しく書いてみよう。
夜明けとともに〇五三〇「配置に就け」の号令で、全員戦闘服装で夫々の配置に就いた。戦闘服装は第三種軍装にゲートルを巻き、鉄兜着用である。噴進砲要員は刺子の防焰（えん）衣をその上に纏い、さながら昔の消防夫のような扮装であった。

六時過ぎ、索敵のため艦攻五機を発進、引き続き艦爆一機と戦爆五機を比島基地に向け発進させた。これで機動部隊の残存機は一〇機余となってしまったが、これでは敵機を迎え撃つにしても直衛機は無に等しく裸同然である。もともと生還は望むべくもない作戦ではあったが、これでは真面の戦闘は出来ない。高角砲と機銃、噴進砲だけを頼りとして、敵機を迎えなければならぬ。

〇六二五 戦闘配食で各自戦闘時の持ち場で握り飯と缶詰で腹ごしらえをした。

〇七〇〇 敵空襲に備え艦隊の陣形を対空警戒陣形とし、戦闘用意が発令された。

敵を少しでも北方に引き寄せようと艦隊の針路〇度（真北）。

○七〇五 索敵機より敵飛行機発見の報。

○七一一 上空直衛機四機発艦。

○七二九 電探（レーダー）で敵大編隊を察知。二六〇度報告二四〇キロ。

伝声管で伝えられた、この報告を聞いて私は後三〇分余りで本艦上空到着と胸算用し、その方向の水平線に目を凝らし敵機群が見え始めるのを待った。

この方向は北方に艦首を向けている瑞鶴の左後方に当たる。

やがて、淡い黒点が見えたかと思うと瞬く間にそれが膨れ上がり、敵機の大編隊と確認出来た。

この方向一〇キロ離れた位置に千歳、千代田の二空母を基幹としたグループがいる。間もなくすると、敵機群が射程に入ったのか、砲弾炸裂の白煙がぼつぼつとその上空に揚がり始めた。このグループに向かった敵機との対空戦が始まったのである。

そのうちに、瑞鶴、瑞鳳を基幹とする我がグループに向かう敵機群も近付いてきた。

○八〇七 「対空戦闘」発令

この号令で高角砲、機銃、噴進砲は何時でも発射できる態勢を整える。

○八〇七 瑞鶴から最後の戦闘機九機が上空直衛として発艦した。

○八〇八 見張員、望遠鏡により敵大編隊（一三〇機程度）を視認。

○八一 檣頭（しょうとう）に戦鬪旗が揚がった。戦鬪旗というのは軍艦旗の小型のもので、軍艦旗は航海中檣頭に掲揚してあるが、これに加え戦鬪時だけ掲揚するものである。

敵機の大編隊は刻々近付き、肉眼でも一機ごとの動静がはつきり視認出来るようになってきた。艦隊上空に近付いた敵機群は、夫々の目標に向け攻撃態勢を取り始めた。敵機を射程内に捕らえた艦は夫々射撃を開始し、空に点々と弾の破裂煙が散り始め、その数も瞬く間に増えていった。

瑞鶴を目標とする敵機群は、やがて数隊に分かれ夫々高度を変え襲撃態勢に入った。瑞鶴の左舷上空高度三〇〇〇メートル位から近付いてきた艦爆一〇数機は、迎撃機がいないことをいいことに、急降下爆撃に入るのに最良の位置である艦尾上空から急降下爆撃の態勢を取り始めた。既にこれらの敵機群に対しては猛烈な対空射撃が開始されている。射撃が始まってしまうと、指揮官は暫く手持ち無沙汰になる。スポーツ競技での監督みたいなもので、一段落するまで何もすることがない。私はせめて最初の敵の襲撃の様子だけでも良く見ておこうと、防空指揮所の右舷後方に移動し、敵機の状況に目を凝らしていた。敵機はわが対空射撃に意を介さぬかのように、五、六〇度位の角度で先頭機から一機ずつ翼を翻し、きらりきらりと陽光を反射させながら急降下に入り、高度五、六〇〇メートルで爆弾を離し機首を上げていく。投下された爆弾の行方を眼で追いながら、その爆弾が何処に落ちるかに興味はあっても、恐怖を全く感じないのも戦場心理によるものか。瑞鶴艦上で艦長が機を失せず回避のための転舵を号令する。

いよいよ戦闘の幕開けだ。全艦の対空砲火が火を噴き、その発射音で会話もままならない。艦長は伝声管に口を付け怒鳴るように「面（おも）舵一杯」「取（とり）舵一杯」等と操艦の号令をしている。幸い最初の爆弾は右舷正横二、三〇メートルの所に落ち大きな水柱が上がったが、二機目以降の弾着を確認している暇もなくなつた。その頃になると、上下左右からの敵機の攻撃も激しくなり、艦は右に左にと巨体をくねらせながら魚雷や爆弾の回避に全力航走だ。艦体は推進機の震動で細かく震え、付近の海面は打ち上げた味方の砲弾の落下による大小の水飛沫で、さながら沸騰したかのように見える。敵機は急降下爆撃に加え、水面すれすれから雷撃機も襲いかかって来る。突然、左舷中部付近で軽い震動と共に爆発音、爆弾命中だ。吹き飛ばされ発着甲板に落ちてきた破片の中に人の片腕があり、それが見る見る内に紫色に変色していくのが、防空指揮所からも良く見える。誰の片腕か、恐らく本人は瞬時に玉砕してしまつたのであろう。ふと海面を見ると敵機が魚雷を投下し、その魚雷がまっしぐらに瑞鶴目掛けて走っている。この時、艦は別の魚雷の回避運動の



瑞鳳（右）と共に敵弾を回避する瑞鶴
(Wikipedia より転載)

ため回頭中で、この魚雷は避けられそうにない。私は防空指揮所の腰囲い外壁の上縁を握り締め魚雷命中に備えた。この魚雷がどの辺に当たると目を凝らして迫っている内に、艦の中央部付近で発着甲板の縁に隠れたかと思う間もなく中央より艦尾寄りに命中、激震と共に水柱があがった。一見大した被害もないように見えたが、この被雷の影響は大きかった。

艦が大きいだけに直ぐ沈没するような事はないまでも、もともと空母は艦体が脆弱にできている。

魚雷の爆発と浸水で電気系統が切れ、左舷の推進機も運転不能となり舵も故障し、艦体は左に傾斜し始め、送信機も全て使用不能になってしまった。推進機は左右二軸ずつ四軸あるが、右舷二軸だけしか使えない。運動能力はともかく、無線が使えなくなってしまったのは、旗艦の役は務まらない。

司令部は旗艦を軽巡の大淀に変えようとしたが、敵機の第二次の襲撃が断続的でありなかなかな移乗の機会が得られなく、長官以下幕僚および司令部附の一部が大淀に乗り移ったのは、この二時間後であった。これらの人達が移乗するためには、両艦が接舷するか、極近距離に漂泊しカッターで移乗しなければならず、艦を停止させるにも結構時間が掛かる上、敵襲の間隙を狙っての作業も敵機の断続的襲撃で、再三中断させられての結果である。この第一次の敵襲で、我が方は秋月と千歳を失い、瑞鳳、多摩も被爆損傷し、更に第二次の敵襲で千代田も雷爆撃で損傷甚だしく直衛戦闘機のない艦隊も無力さを痛感させられた。旗艦変更後の瑞鶴では次の敵襲に備え弾薬の補給やら、対空火器の整備に追われた。

午後一時頃、予期していた敵機の大編隊が姿を現し、これを迎え撃つ味方の熾烈な対空射撃が始まっ

た。敵の攻撃目標は当然、空母の瑞鶴と瑞鳳である。瑞鶴に対しても前後左右から急降下爆撃と雷撃が繰り返され、対空砲火は狂ったように射撃を続ける。第一次の敵襲で被害を受け推進機は右舷二軸だけしか使えず、舵こそ応急電源で動いてはいるものの、回避運動もままならないまま瑞鶴は敵機の攻撃に身を晒している。敵機はここを先途と執拗な攻撃を続け命中弾も数発を数えた。左舷の射撃指揮官としては、艦の左側の空域の敵機の姿をつぎつぎ目で追うのが精一杯で、射撃は各機銃群や個々の機銃に任せるより仕方がない有様である。艦は不自由な運動性能ながら必死に回避運動を続けていたが、再び左舷中央部に雷撃を受け、艦体は更に左に傾き、右舷推進機も運転不能となってしまった。この間、右舷にも被雷したようであるが、視認できる状況ではなかった。弾丸の欠乏か、傾斜のため射撃不能になったのか、敵機が数機上空にあつても射撃している機銃もまばらになってしまった。発着甲板に配備の単装機銃だけが時々発射音を響かせる。艦は洋上で完全に停止し、機関の運転騒音もなく、防空指揮所も静寂そのもので、劇戦の後とは思えない安らぎを感じる程であった。

上空に散見される敵機も落とす爆弾も魚雷も無くなったのか、瑞鶴の最期を見届けようとしているのか攻撃の姿勢を見せない。左に大きく傾いたまま洋上に静止した瑞鶴では、防空指揮所の艦長の所に艦橋から副長、航海長等も上がってきて、やがて「総員発着甲板に上がれ」が命せられ、乗員は夫々部署を離れ発着甲板に集合した。その数、数百名。艦長は一場の訓示の後、軍艦旗降下を命じ、唖々たる喇叭の音と共に軍艦旗、戦闘旗が降ろされた。その後「総員退去」の命で乗員は思い思いの場所から海中に飛び込んだ。防空指揮所の我々は発着甲板上の人影が見えなくなったのを機に海中に入る準備にかかった。艦長は

幹部士官の退鑑の勧めにも応ぜず、私も七二期の艦長附都野航海士に降りるよう説得したが、艦長と行を共にするといつて聞かず、そのまま艦から離れなかった。

防空指揮所にいた者も一人二人と艦を去り、残り一〇名程になった頃、私も一応挨拶して、たまたま指揮所に上がってきていた同期の石丸中尉と一緒に舷外に吊り下げたロープを伝って海に降りた。

海面に達してからは取り敢えず艦沈没の渦に巻き込まれまいと、一〇〇メートル位離れるまで力泳した後、振り返えると、艦体の後部半分は既に水没し、艦首を高く上げ、赤い下腹を見せた瑞鶴の姿が見えた。私は瑞鶴の沈没まで見届けようと、その場で瑞鶴を凝視しながら片方の耳を海中に漬け、水中から伝わってくる音にも耳を澄ませた。特に大きな音は聞かれなかったが、炒り豆がはせるような音が間断なく聞かえ、何か吠えている様にさえ思われた。艦は左に大きく傾いているので、防空指揮所の艦長の姿は見えなかったが、左舷がわにいた者は艦長が手を振っているのを目撃している。

艦首を上げてからの沈む速度は早かった。水没の間、私は涙を流しながら瑞鶴に挙手の敬礼をしていた。時刻は午後二時一四分、場所はルソン島北端エンガノ岬の東北東二六〇マイルであった。

さて、海に入ったものの、回りに味方の艦がいるわけではない。浮いていれば何んとかなるだろう位の気持ちで、近くの者たちに声を掛けながら、ゆったりと泳ぎ続けた。海面は重油に覆われ、顔は重油で真っ黒で人の判別も出来ない。陽射しは強く、重油を被った顔を容赦なく照らし、目の回りがひりひりする。海水で拭う度に痛みが倍加するようだ。泳ぐことよりその方が辛い。

遙か数千メートル先に伊勢か日向か識別できないが航空戦隊が対空砲火を射ち始めた。目を凝らすと二、三

○機の敵機が攻撃を始めたようだ。海中の我々も期せずして声援を送り同艦の健闘を祈りながら成り行きを見守ったが、幸い大きな被害もないまま戦闘は終わった。漂流すること二、三時間、既に重油による被害もなくなり、太陽も西に傾き始めた頃我が駆逐艦の姿が見えた。若月、初月の二隻が我々を救出に来たのだ。今まで無心？で泳いでいた者たちも、急に生への執着が生じたのか喚声をあげ両艦の近付くのを一日千秋の思いで待った。やがて両艦は我々の所から数百メートルの所に離れ離れに停止し、漂流者を收容し始めた。私の回りの連中も夫々その一艦を選び、力泳し始めた。私はやや遠くにいる一艦を指すことにした。近いほうの艦に向かう者の方が多いように見え混雑も予想され、また体力も余裕があつたので、近い方は疲れている連中に譲ることにした。これが生死を分ける事になるとは思いもしなかつた。私が收容されたのは若月で、他の一艦は初月だったが、初月はその後、敵艦隊の追撃に捫まり、宵やみ迫る洋上で一艦で良く敵艦隊と砲撃戦を演じ、遂に沈没。生存者なしの悲運な結末となつてしまつた。

この救出作業中にも数機の敵機が来襲し、艦は救出を中断、いきなり航走を始め対空戦闘に移ること二度。ロープや舷側に手が掛かりながら置き去りにされた者が何人もいる。敵機の去るや否や再び元の海面に戻り、救出に掛かつたのだが、果たしてそれまで持ち堪えられたか定かではない。この戦闘での我が機動部隊の損害は、空母瑞鶴、瑞鳳、千歳、千代田、軽巡多摩、駆逐艦秋月、初月の七隻沈没、航空戦隊伊勢、日向、軽巡大淀、五十鈴が損傷という結末であつた。

一方、レイテ突入を主任務とした遊撃部隊は、戦艦三隻（武蔵、扶桑、山城）、重巡六隻（愛宕、摩耶、最上、鳥海、鈴谷、筑摩）、軽巡二隻（能代、阿武隈）、駆逐艦八隻（満潮、山雲、朝雲、早霜、野分、藤

浪、不知火、若葉）が沈没、損傷艦は戦艦以下、多数という惨憺たる損害を受け、レイテ湾を目前にしたがら、突入を打ち切り反転帰投し、捷一号作戦は敢え無く潰えて終った。機動部隊の残存艦の一部は直接、呉に帰投、主力は一旦、奄美大島の薩川湾に入泊。そこで我々は日向に移乗させられ、一〇月二十九日、内地に帰投し、瑞鶴の生存者は一時、呉に近い三つ子島に隔離收容された。これは瑞鶴沈没を秘匿するための処置であつた。

三つ子島にいる間、私は戦闘詳報作成の手伝い等残務整理に追われながら、日を過ごしていたが、一月一〇日、駆逐艦桜艀装員の辞令を受けた。

実は日向便乗中、我々に今後の転勤先についての希望調査があり、私は駆逐艦水雷長と申告して置いたのが、実現したのである。

五. 駆逐艦桜から紀伊防備隊そして終戦直後まで

桜は当時、横須賀海軍工廠で艀装工事中であつた。私達は三つ子島にいた間は外部との接触が絶たれていたので、庶務主任が世話役となり我々の注成品を呉で購入してきてくれ、裸同然だった私もどうにか転任出来る程度の身の回り品は整っていた。ただ、軍服をどうやって採寸したのかは思い出せない。

とにかく真新しい服装で転勤の途についた。途中、神戸で一泊、東京の自宅で一泊して一七日に、工廠

内岸壁の桜に着任した。

桜という駆逐艦は、その頃、輸送船の被害増大に鑑み護送駆逐艦の急速建造の必要から、昭和一九年四月以降建造された戦時急造型のT型駆逐艦の一艦で、排水量一、二六二トン、長さ九八メートル、出力一九、〇〇〇馬力、速力二七・八ノットの小型艦で、一、〇〇〇トン以上を一等駆逐艦と称する範疇には入るが、このT型駆逐艦には二型駆逐艦並の樹木の名が付けられていた。兵装としては護送が目的だけに、魚雷発射管が通常の駆逐艦より少なく、四連装一基だけであったが、対潜水艦兵器として爆雷は三六個を搭載、水中探信機、水中聴音機は最新のものを装備していた。

因みに、去る捷号作戦でも、機動部隊本隊に桑、榎、桐、杉の四艦が参加している。

着任後慌ただしく数日が過ぎ、二五日竣工、引き渡しを受け、艀装員、艀装員附は正式の乗員になった。

艦内編成は時雨と同様であったが、乗員は若年化し、士官は駆逐艦長六五期、先任将校（砲術長）は先のエンガノ沖海戦で沈没した新鋭の防空駆逐艦秋月の先任将校だった六六期の砲術長、航海長はこれまた沈没空母瑞鳳の見張士だった七二期、通信士は七三期、機関長は五〇才をすぎた特務士官の大



駆逐艦 桜 (Wikipedia より転載)

尉という具合で、誠に急場凌ぎの人事構成であった。

桜は、竣工と同時に第一一水雷戦隊に編入され、可及的速やかに内海西部に回航を命じられた。第一一水雷戦隊というのは新造の駆逐艦の訓練部隊で、既に内海西部において、就役したばかりのT型駆逐艦がその傘下で速成訓練中であつた。その頃の戦況は、捷号作戦によるレイテ突入の不首尾で連合軍の同島上陸を許し、ルソン島決戦を企図していた我が陸軍も、この機を捉らえレイテでの決戦に切り換え、ルソン島に配備の兵力と同時に増強される予定の部隊を急遽レイテに振り向けることになり、南西方面艦隊は、既に乏しくなつていた艦艇、船舶の全力をあげ輸送に当たつていたが、回を重ねるに従い被害も多くなり、同島の確保は困難となつていた。この輸送作戦は「多」号作戦と呼ばれるが、T型駆逐艦も桑、竹、桃、桐、杉等が参加していた。瑞鶴沈没の後、缶詰状態の生活で又々情報音痴になつていた私は、捷号作戦後の比島の状況についての認識は想像の域を出ていなかったが、敵の勢力圏下での増援輸送が相当な被害をもたらしているとは推測できていた。

第一一水雷戦隊司令部も、新造駆逐艦の錬成に一日も早く掛かりたかつたのであろう。

一方、日本本土も一月に入つてからB二九の単機偵察が関東地区で視認され、二七日には八〇機のB二九が東京の中島飛行機製作所を爆撃した。これらのB二九は、かねて懸念されていたようにサイパン、テナアンから発進したものであろう。当時、横須賀工廠では信濃という大型空母の艤装中で、その完成も間近であつた。信濃は大和、武蔵の姉妹艦として進水したが、ミッドウェイ海戦後、空母に設計変更され、

巨大不沈空母として、その就役が期待されていた。もともと戦艦として建造されていたので、速力こそ二七ノットしか出なかったが、艦体は堅牢で飛行甲板は大鳳に優る装甲が施され、文字通り不沈を確信させる空母であった。

右記のB二九の空襲は、遠からず横須賀被空襲の危惧を生じ、この信濃に即刻、呉回航が命じられた。内海西部に単艦で回航を急がれていた桜としても、敵潜水艦が出没する海域の航路選択の参考として、信濃の回航航路を知りたいと思い、私は同期生のいる護衛駆逐艦に問い合わせに行った覚えがある。

信濃は敵機の空襲を受けた際の回避運動を考慮し、大きく迂回する航路を選んでいった。が、これが結果として敵潜による被雷沈没の悲劇をもたらしてしまった。

さて、引き渡しを受けた桜は、取り敢えず瀬戸内回航のための航行訓練を優先し、東京湾内を縦横に航走、機関取扱いや航海機器の操作習熟に専念した。乗組員の数は一応揃ったものの、沈没艦からの寄せ集めと初めて艦に乗ったという兵もおり、機関の運転操作、航海機器の取扱い、人員配置等々すべて白紙からの訓練であり、満足のいく仕上がりには程遠いまま、一二月初旬横須賀を出港することになった。

この出港に先立つ一二月一日、我々七一期は海軍大尉に進級した。私は最期の別れの積もりで、その直後の一夜、高円寺の自宅に帰った。まさかそんなに早く大尉になるとは思ってもいなかった両親もびっくりしたようである。海軍も戦死者続出で、大尉配置を埋めるために進級を早めたのである。

一二月七日、どうやら瀬戸内回航の自信が出来た桜は横須賀を出港、本州沿岸沿いの航路を選び呉に向かった。信濃の被雷沈没は、既に承知していたので沿岸沿いを選ぶのに躊躇はなかった。

途中、用心深く夜間は陸岸近くに仮泊しながら、一〇日、呉に入港。

翌日、第一一水雷戦隊の訓練泊地に進出、その指揮下で訓練に入った。

既に楓、樺が在泊中で、桜と前後して同型艦の檜、椿、橘、柳等が加わった。

訓練の主眼は一日もはやく戦闘能力を付けさせることである。どの艦も各海軍工廠や民間造船所で建造されたばかりの艦で、約二ヶ月、達成訓練の日が続いた。この間に、先任将校が七〇期の砲術長に、機関長は若手の特務中尉に代わった。やがて一応の訓練が終わり、桜は支那方面艦隊に編入され上海根拠地所属となり、門司から上海まで輸送船三隻を護送、無事上海に入港した。揚子江は流石に大河で黄海と河口の区別が付かぬ程で、何と言っても海そのものの感じであった。

上海は日本内地より物資が豊富のように見えたが、国際都市だったせいかもしれない。私は当てもないのに、カンガルーの皮の靴と背広生地を買ってみたりしたが、生地は内地帰投後、後輩にプレゼントしてしまった。上海に三、四日碇泊後、輸送船三隻に分乗した陸軍部隊を南支の汕頭に護送するため上海を出発、低速船団なので数日かけて無事目的地に到達した。

この陸軍部隊の汕頭進出は敵の台湾侵攻に備えてのものであった。この任務を終え上海に帰投するや、桜は連合艦隊復帰を命じられ、内地に引揚げる婦女子を乗せた吉林丸を下関まで護衛の後、瀬戸内海西部の泊地に回航を指示された。この指令で三月半ばに内海西部に到着した桜は再び第一一水雷戦隊に編入され、三月一五日、桜、樺、檜、柳、橘の五艦で第五三駆逐隊が編成され、司令の乗艦が桜となった。

この頃、敵機動部隊は九州、四国の航空基地を攻撃、呉軍港も空襲され艦艇、陸上施設に少なからざる

被害を受けた。我々の泊地上空を素通りして行く敵機も視認され、呉の被害を心配したのを思い出す。

駆逐隊は編成されたものの、燃料が乏しく航行訓練等は殆ど行えず、専ら碇泊のままでの訓練に終始しながら出番を待っていた。

ところでこの時期の戦況は、捷一号作戦が不本意な結果となった比島においては、レイテ島決戦を企図する陸軍は同島に増援部隊を増派することになり、海軍は残り少ない艦艇をその護衛に全力投入した。

海空を制した連合軍に対しては無力同然で、犠牲に効果が伴わず、遂に同島を放棄、ルソン島で自活抗戦に方針変更となり、苦しい戦闘を続けていた。二月にはマニラも奪還されてしまった。

一方、関東地方は二月中旬、大規模の敵艦上機の空襲を受け、硫黄島は米艦隊の砲撃に晒され、一九日米軍は遂に同島南海岸に上陸、我が守備軍二万はこれを迎え撃って約一ヶ月余りの激闘が行われたが三月一七日抗戦空しく玉砕。また、この間、沖縄、南九州に対する敵の空襲も激しさを増し、四月一日、遂に米軍は沖縄本島に上陸、血みどろの地上戦が開始されていた。

この侵攻軍に対し航空総攻撃が下令され、陸海軍の特攻機多数を含む激しい航空攻撃が敵上陸地点の艦艇に集中された。これに呼応し水上部隊の特攻として、四月六日、戦艦大和が軽巡一、駆逐艦八を伴い、内海西部を出撃したのであるが、望みをかけるには余りにも貧弱な兵力であった。

しかし、これが当時使える艦の全てであり、また燃料の在庫も底をつき、これ以上の艦艇の出撃は望めぬ状況でもあった。この大和部隊も翌七日、午前中から敵機動部隊の艦上機の猛攻を受け、大和は午後二時過ぎ九州南端の坊ノ岬沖にその巨体を没した。随伴の軽巡一、駆逐艦四も沈没、損傷艦二隻を含む駆逐

艦四隻だけが佐世保に帰投した。この大和部隊の出撃はわれわれの泊地からの出撃であったので、その後の状況は即日知り得たが、沖繩の戦況については詳しいことは分かっていた。ただ近い将来、本土に敵侵攻があるであろうと覚悟をしての毎日であった。

その頃、沖繩上陸の援護を終えた敵機動部隊は、我が方の制空力の貧困に付け込み、本土近海を遊弋、太平洋沿岸の主要都市に対する艦上機による空襲が頻繁に報じられるようになり、内海西部も訓練泊地としては思わしくなくなり、第一一水雷戦隊は裏日本に移動することとなった。五月二五日、旗艦酒匂以下在泊の全駆逐艦は七尾湾に向け泊地を出港した。桜は嚮導艦（きようどうかん）を命じられ、単縦陣の編隊の先頭を進んだ。

関門海峡付近には三月下旬頃からB二九の編隊により無数の磁気機雷が投下敷設されており、この機雷原を先頭切って航行するのは余り気持ちのよいものではない。間もなく関門海峡に入ろうという時、突然艦尾に大激動を感じ、大きな水柱が上がった。磁気機雷の爆発だ。途端に舵が利かなくなった桜は隊列を離れ、被害状況確認のため陸岸近くに碇を入れ仮泊した。

被害は幸い人員には被害なく、舵取機の電動機の台座の破損だけであった。

ただ水深が浅い所だったので水柱が大きく上がり、後続艦では桜裏沈と思ったようだ。

被害は軽微というものの、舵が利かなくては航行はできない。仮泊のまま艦の工作員（金工）の応急修理で一応航行可能となったので、翌日呉に引き返し本格修理を行うことになった。

呉の工廠で修理工事中、私は工廠内の機雷実験部にあった米磁気機雷の実物を見にいった。同所には誤

つて陸上に投下された磁気機雷が收容されていて、分解研究中であつたが、その精巧さに目を見張つたものである。一口に磁気機雷といっても、近接する船体の磁気とその航行による海中の水圧変化との複合した状態で起爆する磁気水圧機雷、一定の周波数帯のスクリュウ音に反応する音響機雷等があり、更に起爆状態になつても、それが設定回数に達しないと起爆しないよう調整する装置を併設し、掃海を困難にさせる工夫もされていた。

そのときは、戦後、この機雷を掃海する任務に就こうとは夢にも思わなかつた。

この間、桜の脱落で折角編成された第五三駆逐隊も、各艦ばらばらの任務を与えられ、以後統一された行動を取る機会はなくなつた。

さて、呉で修理を終えた桜は大阪警備府の傘下に入り、大阪湾内に碇を入れ、B二九による機雷の投下敷設の監視と湾内航行の船舶に対し安全航路指示の任務を与えられた。七月五日、大阪築港の二五六度、五・六マイルの地点に投锚した桜は所定の任務を遂行しながら、来るべき本土決戦に備へ碇泊のまま訓練に明け暮れていた。この間にも、何度か阪神地区に対するB二九の夜間爆撃が望見され、切齒扼腕の思いを味わたつたものである。

この頃、わが方は既に邀撃する戦闘機も乏しく、燃料は底を突いており、敵は文字通り傍若無人勝手放題の状態であつた。七月一〇日、敵機動部隊が阪神地区に来襲の算大との情報で、大阪警備府から湾内に碇泊していた桜と櫂に、敵機から視認され難い場所への移動の指令があつた。大阪湾の真ん中に碇泊している駆逐艦を発見したら敵は集中攻撃を加えるのは間違いないし、この指令は当然であつたらう。

桜は、この指令により一日黎明、錨を揚げ安全航路をはみ出さぬよう、その場回頭で艦首を避泊地の淡路島に向け、前進を始めた直後、大激震を感じると同時に艦尾直下から大きな水柱が上がった。用心していた触雷である。

これは今まで碇泊していた場所から、さして離れていない所に既に磁気機雷が敷設されていたことになる。最近、問題になっている地雷同様、海底に敷設された機雷も探査除去が極めて困難な厄介な代物で、誠に不運の一語に尽きる。前回の関門海峡付近での触雷は高速航行中で、爆発は艦尾後方であったが、今回は速度がなく、艦体直下での爆発であっただけに被害も大きく、これが桜の命取りになってしまったのである。

駆逐艦の水雷長は火急の際には応急指揮官となるのが建て前である。

応急指揮官ともなれば真つ先に現場に行かなければならない。触雷の被害状況確認のため、艦橋を降り艦尾に向かった私は、艦の中央付近で大手を広げた掌水雷長（特務士官）に行く手を阻まれた。「艦の後部で火災が発生。危険だからこれから先には行くな」という。彼は既に被害状況を見てきていたのである。

見れば艦尾から白い煙が上がり始めている。艦尾部分には弾火薬庫や魚雷火薬庫があり、これらが熱に晒されては一大事である。危険だから行くなといわれても火災を放置するわけにはいかない。発電機が触雷と同時に時に止まってしまっているので通常の消火ポンプは使えない。取り敢えずガソリン動力の消防ポンプの始動を命じ、ホースの筒先を握り締め水の出始めるのを待った。ところが期待したポンプがなかなか掛からない。訓練では直ぐに掛かったのに、触雷のショックでどこか故障したのであろう。

筒先を握ったまま始動を督促している最中、艦尾が大爆発を起こし、目の前が真っ赤な炎で一杯になり、その赤い炎の中を黒い破片が飛んでいるのが見えたと思った瞬間、私は海面に転がり落ち、気が付いたときは水の中だった。

水中で気泡の上がついていくのを見ながら、一瞬、爆発を防ぎ切れなかった応急指揮官としての責任を感じ、海面に顔を出すべきかどうかと考えたが、息が苦しくなって海面に出た。桜は横転し艦尾から沈没、艦首の底を上に向けた恰好で静止していた。水深二、三〇メートルのところなので、艦尾は着底していたであろう。海面には既に何人か浮いていたが、暫く泳いでいるうちに司令、艦長の顔も見え、幾らか気も楽になった。沈没はこれで二度目であったが、今度は、大阪湾の中でもあり、陸地まで一万メートル位の場所で、生命の危険は感じなかったが、水温が七月にしては思ったより低く、これには往生した。ただ燃料の搭載量が少なかったせいかな重油で目をやられることもなく、仲間と励まし合いながら救助されるのを待った。

泳ぐこと一時間余りだったが、たまたま通航の運搬船に救助され、大阪築港の岸壁に上陸した。岸壁には既に救難関係者が待機しており重傷者は直ちに病院に運ばれた。私も後頭部に裂傷があったらしく、軍医の治療を受け包帯で鉢巻きされ、一端の負傷者の姿になってしまった。

その後、生存者は大阪市内の空き小学校に移され、そこを宿舎に残務の整理に当たったが、乗組員三三〇名中一三〇名が幽明境を異にしていた。沈没が大阪湾内だったので、戦死者の遺体が沿岸の阪神地区や淡路島に漂着し、その連絡がある都度、生存者で収容隊を組んで現地に出掛け、遺体を茶毘に付し遺骨

を持ち帰っては宿舎に安置していたが、私は戦闘詳報の作成を担当していたので、遺体の茶毘の経験をしていない。そうこうする内、ぼつぼつ転出するものが出始め、私にも二〇日付で紀伊防備隊分隊長の辞令がきた。紀伊防備隊というのは和歌山県の紀伊由良に在る。二五日、阪和線、紀勢線を乗り継いでの赴任であったが、今度は着る物だけは何とかなったが、短剣等は既に手に入らない状況で丸腰のままの着任であった。

丸腰というのは無防備の謂であるが、残務整理中の講話で聞かされた米軍のM四戦車の威力が頭にあつたのか、手榴弾を持ったままM四戦車の下敷きになる夢を見たりした。林檎の皮位しか剥けない短剣でもあるとないでは大違いを実感した次第。

さて、紀伊防備隊で与えられた配置は、甲種、乙種の予科練習生二五〇名の分隊長。一四才から一七才位までの少年ばかりの分隊で、本来、飛行兵になろうとして志願してきた連中である。こうした連中が當時は何千名といながら、既に飛行機はなく、燃料もないまま、全く別の任務に切り替えられ、震洋と名付けられた舢先に爆薬を付けたモーターボートで敵艦に体当たりする訓練や、魚雷を加工し人が乗れるようにした人間魚雷といわれた回天、簡易潜水服で海岸線近くの浅い海底に潜んで、爆薬の付いた棒で敵の上陸用船艇を下から突き上げる伏竜等、己の生命と引き替えに敵を攻撃する特攻隊としての訓練が各基地で始められていたのである。紀伊防備隊には伏竜体の訓練が課されていた。とはいっても、訓練用の潜水服は二着しかなく、二隻のカッターに分乗した練習生に一〇分間位の潜水を経験させるのが精々で、その他の者は陸上で球技に興じているというのが実情であった。

八月六日、広島に特殊爆弾が投下され、市街全域が壊滅状態になったとの情報に接した。その後、特殊爆弾はどうやら原子爆弾らしいとの情報も伝えられ、ことの重大さに愕然とした。その三、四日後だったか予備学生の連中からポツダム宣言が放送されたとの話を聞いた。彼等の中に電信室勤務の者があり、短波放送を聞いていたのであろう。

これを受諾することになるとはその時点では思いもしなかった。

やがて、八月一五日、終戦。戦には勝てぬまでも本土決戦で最後の死に華を咲かせようと心に期していた身には余りにも呆気ない結末であった。ミッドウェイの敗戦はともかく、初陣のガダルカナル撤退以来戦勢の悪化を肌で感じてはいたが、まさか手を上げるとは思いも寄らぬことだった。

今までの計り知れない多くの犠牲は何だったのか。あれこれ思いを馳せると余りの悔しさに我を忘れる思いであった。同日の夜になって、大阪警備府から機密保持のため大阪湾に沈没している桜を爆破するよう紀伊防司令に指示があり、私にその任が与えられた。

翌日、早速準備に掛り、私の誕生日を期して一七日午前零時に紀伊防を出港した。

この時の私は、桜の爆破と共に自分も一緒に爆死する覚悟であった。

明るくなった頃大阪湾の桜の沈没点付近に到着したが、付けられていると聞かされていた浮標が見当たらない。大阪湾は底質が泥で柔らかく桜は海底に埋まるように沈下し海面から艦体を没してしまつたので、危険防止の為浮標がつけられている筈だった。桜の発見は浮標があれば簡単と高を括っていただけに浮標

の流失は大きな誤算である。乗ってきた船は木造の曳舟で、羅針儀は磁気羅針儀で精度は余り信用出来ない。備品の六分儀で三角測量で位置を求めながら、桜の沈没位置と覚しき場所を行きつ戻りつ探したがなかなか発見できない。伏竜の訓練用の潜水服を搭載してきていたので、舷側に宙吊りの形で水中を透視しながらの搜索も行ったが結局見付からず終い。二、三日、こんな作業を続ける内、私は桜の爆破の意義に疑問を感じ始め、乗組員も意欲を失ったのを機に、「桜爆破完了」と虚偽の報告をして引き上げることにした。桜が見付からなかったばかりに、爆破の際、共に爆死しようとの考えも薄くなり、かくも生き長らえることができたわけである。

紀伊防備隊に帰投した後、今度は終戦の後始末が仕事となった。

もともと防備隊というところは幹部士官の構成も第一線の部隊とは程遠く、紀伊防備隊も、司令は予備役の大佐で副長は商船学校出の予備少佐、後は特務士官と予備学生の士官が主で、兵学校出は私と七四期の少尉二名だけであった。終戦となって、先ず應召者から順次、復員（帰郷）することになり、予備学生、予科練等も復学のため早々に隊を離れた。

私は立场上、復員というわけにもいかず、武器弾薬等の処分、紀伊防塵下（きか）の湖の岬、日の岬の見張所の閉鎖等の雑務に追われながらの日を過ごした。

やがて九月に入り、米艦が和歌の浦に入泊することになり、連絡士官としてその艦に暫くの間、乗艦させられた。連絡士官とは名ばかりで米艦が日本の過激派に攻撃されるのを予防するための人質だったのだらう。乗艦中は海軍大尉として礼遇されたが、夜間は私室の前に拳銃を帯びた番兵が立っていたのには驚

いた。

そんなある日、艦長室に招かれウイスキーを振る舞われたことがある。米海軍では艦内での飲酒はご法度である。艦長は内緒の仕草をしながらベッド下の引き出しの奥からやおら瓶を取り出し、いたずらっぽい顔付きでグラスに注いでくれたものである。

話題は磁気機雷の掃海についてが主であった。米海軍は己の投下敷設した機雷を日本海軍がどう処理したかに格別の興味があつたらしく、艦長は即刻上級司令部に報告電報を発信し、その写しを私にもくれた。

一月三〇日、予備役に編入と同時に充員召集の辞令。

この日まで陸海軍は存在していたのである。

終戦に伴い陸海軍の部隊は解散され、その将兵は夫々部隊を去ってしまったものの、外地に在る将兵を内地に帰還させるための輸送船運航と瀬戸内海はじめ日本本土周辺の機雷処理のための要員が必要となり、元海軍の将兵に改めて召集がかけられていたのである。私は終戦以来引き続き在籍していたので、海軍解散の日付で予備役編入、即日、充員召集となったわけである。

一月二日、陸海軍省は夫々第一、第二復員省に改編され、私は第二復員事務官（高等官六等）に身分が変わった。少尉以上の軍人は高等武官といわれ、将官は一、二等、佐官は三、四、五等、尉官は六、七、八等となっていた。従って大尉は六等というわけである。

その後、第一、第二復員省は復員庁に統合され、第一、第二復員局となり、やがて、掃海、管船業務は

運輸省、海上保安庁、海上警備隊とその所管を転々としながら、海上自衛隊へと移っていったのである。一方、復員・援護業務は厚生省に移され引揚援護局を経て同省援護局と次第に規模を縮小していった。

第二復員事務官になると同時に、大阪警備府が衣替えした大阪地方復員局麾下の大阪地方掃海支部の分隊長の辞令をうけた。当時、紀伊防備隊も大阪掃海支部紀伊派遣隊に名称が変わっていたのである。

終戦処理業務の内、海軍に課せられた最重要なものは、復員輸送と掃海であった。数百万に及ぶ外地に在る軍人や民間人の内地引き揚げは容易な業務ではなく、日本海軍の残存艦艇に加え米海軍からも多数の艦艇の貸与を受け、元海軍軍人により米軍から燃料の供給を受けての運航であった。

また、戦後日本経済の復興のためにも、大阪・下関間の瀬戸内海一貫航路の掃海は緊急事であった。

大阪地方掃海支部分隊長に補された私は、以後一年半に亘って、神戸と小豆島を基地とし、瀬戸内海（播磨灘）の掃海業務に従事することになった。

あとがきにかえて

金丸 秀光

息子の純が今年（平成二八年二月）に一七歳になります。これからの数年間に「命の危険」に何度も遭遇するということは、家族として考えられないことであり、同時にあってはならないことです。

ところが、七〇年前には当然のこととして社会に受け入れられ、大切な命が散っていききました。国家が戦争に突き進む時の恐ろしさを改めて痛感します。一方、あつてはならないと言いつつ世界のどこかではつねに戦争が続いています。この冊子からは、戦争という極限状態の中で必ず勝つ（勝てる）と誘導された）という信念、或いは、勝つことが目的の戦争がいつの間にか戦争自体が目的になってしまった悲しい異常空間の中で、人間がどのように行動するかを垣間見ることができました。不謹慎な言い方ですが、士官という立場から客観的に戦場を捉えられていたからかもしれません。

いずれにしても、敗北に向かいひたすら軌道を進む国家の恐ろしさ、そしてその軌道の中で二〇歳前後の若者がここまで幾度も死を覚悟しその危機から脱した「航跡」に驚きを禁じえません。

